

沈小 劇 惡

駒 比 乃 志

著 園 孫

河

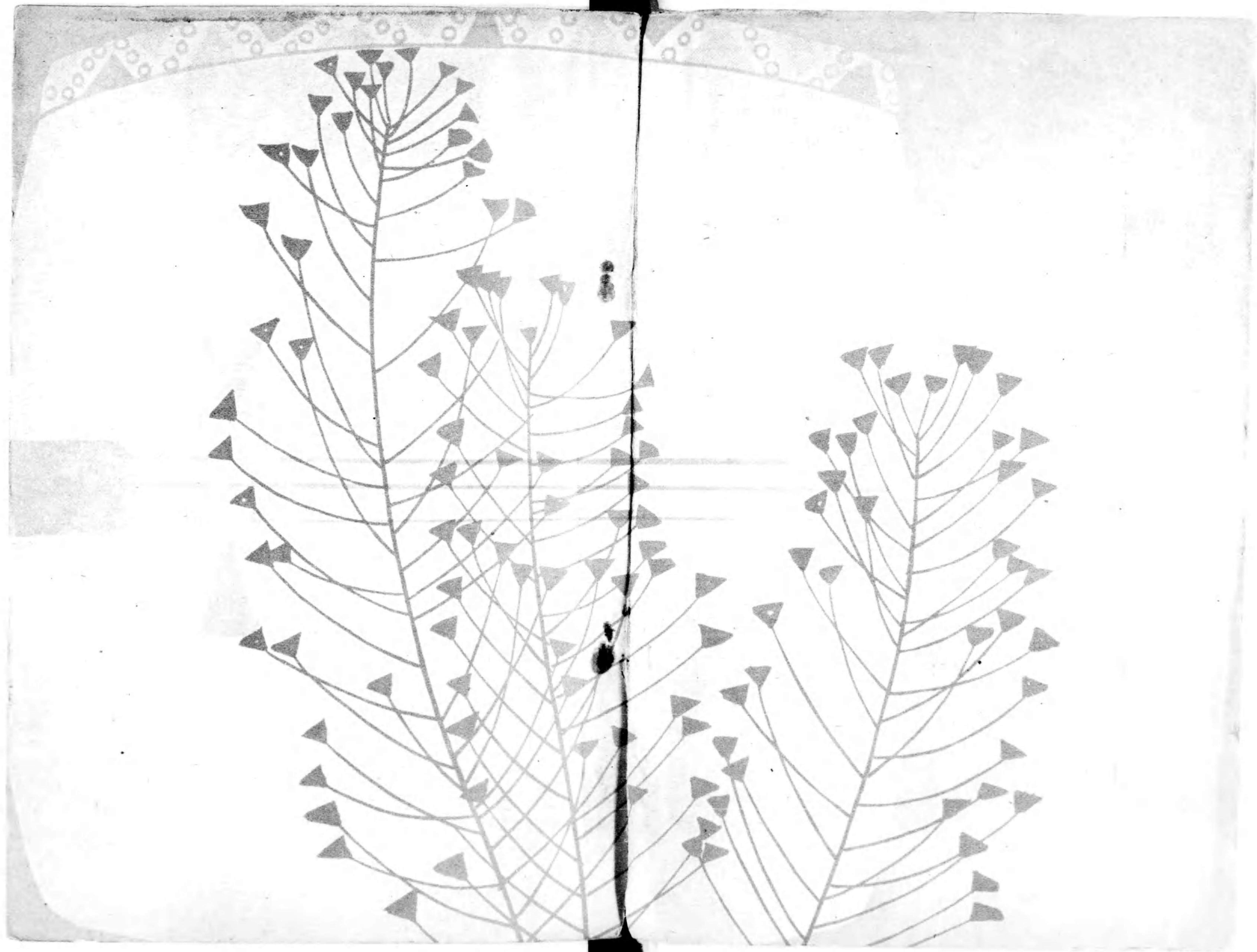


179
672



始







青木孫園著

悲劇小説
志のび駒



大正
7. 9. 12
内交



五子圖

志のひの別

特 106
38

し の ひ 劇



悲劇小説
志のび駒

青木緑園 著

四つの袖

一

暮れかゝる海のはてに、波がしらの光る頃であつた。
相州鎌倉の海岸の、波うち際を、田村種長は戀仲の小川仲子と手を取りあつて、
楽しさうに話しながら漫歩をして居た。風も二人の仲を煽るのか、涼しげな白地
の浴衣の裾を吹きまくつて居た。

小さい波が、びちや／＼と岸を洗ふかと思ふと、今度は大きい波がどつと押しよせて来る。それを繰りかへし繰りかへしてゐる。有りふれた海の景色ではあつたけれども、戀仲の二人にとつては珍らしくも嬉しい景情である。

日はもう全く影をかくして、幾日かの月が磨きあげたやうな姿を雲の間に現はして、白い光が波のうへを長蛇のやうに曲りながら流れてゐた。

「宛で繪のやうですわね。」

と、仲子は言つた。

「フフ。」

と、種長は笑つて、

「可笑なことを言ふね、繪を見て本物のやうだといふなら聞えるけれども、本物の景色を見て繪のやうだなんて言ふやつがあるもんか。」

「だつて、左様ぢやありませんか。」

「左様に異いさないさ、繪といふものは恚うした自然の景色を、本物に似せて寫すの
だもの、はゝゝゝ。」

「はゝゝゝ。」

と、二人は楽しさうな笑に聲を合せて、顔を見合つて、お互ひにしつかり其の手を握り合つたのである。

そばへ寄つたかと思ふと、又離れて歩つて見たり、離れたかと思ふと、又一所になつて見たり、前になつたり、後になつたり、二羽の蝶が春の野を舞ひあるつてでもゐるやうに四つの袖を並べ肩を揃へて歩つてゐる。

「宛で波のやうだわね。」

と、またしても仲子が言つた。

「えッ？ 何故？ 何が波のやうだつて言ふんだね。」

「ふたりが……あたし達二人がさ。」

と、仲子はさつと顔を染めた。そのうす紅の横顔をちつと覗いて、わざと解しかねるやうな途惚顔を見せる。

「何故？」

「だつてさ、雜れたり近寄つたり、宛で波が岸によせたりかへしたりしてゐるやうぢやありませんか、ねえ。」

と、仲子は羞恥しげに低語いた。

「左様か、其の事か。」

「ね、左様は思はなくつて？」

「フフ。」

と、種長は微笑した。

「はゝ。」

仲子も笑つたが、ふと何を考へたのか、その晴れやかな顔を曇らせて、はつとは

かりに溜息をついたのであつた。

「如何したの。」

と、種長は心配さうに覗いた。

「あたし、あなたに御話があるの。」

「左様だつたね、其の話を訊くつもりで、わざ／＼二人ざりて出かけて来たんだつね、何んな話なの、一體。」

あの………」

と、口籠つて顔をあかく染める。

その横顔がたまらなく可愛い。この美しい女を自分のものとして、斯うして晴れて手を取り合つて暢氣な旅に出てゐるといふことが、種長にとつては誇らしい。嬉しい。さうして楽しい事の限であつた。そして何となしに、

「仲ちゃん。」

と呼んで見た。

二

「え、何有？」

「何有つて、仲ちやんが話をする譯ぢやなかつたの。」

「ああ、左様でしたわね。」

と、ため息になる。

「お話し、そんな心配さうに溜息なんかついてさ、如何したと云ふのだね。」

仲子は黙つて種長の顔を見た。その美しい眸に、星のやうな涙が光つてゐる。

種長はハツとしたやうに言葉を重ねて、

「どうしたんだい、仲ちやん、そ、そんなに涙を流してさ、え、どうしたの、如何

したの、黙つてゐたんぢや些とも解りやしないぢやないかね、え、仲ちやん。」

「……………」

まだ黙つてゐるので、種長は本當に心配し出した。どうしたんだらう仲ちやんは、困つたなあと眉を潜めた。

「どうしたの、え、仲ちやん。」

「ねえ種さん。」

「何だね、何か心配があるのかね、あつたら遠慮なく御話しよ、ひとりできよく心配してるなんて、一體そりや水臭いといふもんだよ、さあ遠慮なく御話しな。」

「あたしね、本當に心配なことがあるの。」

「だから、それは何だつて訊いてるんぢやないか、そんなに持たせよをしないで、早く言つちまつたらいいぢや無いか。」

「だつて、言つたら貴夫、あたしが厭になるでせう。」

「何をいふんだよ、今更そんなことを言ふ奴があるもんか、厭だの、飽きたのつて、

「そ、そ、そんな僕だと、仲ちゃんは思つてるのかね、ば、僕の此の赤心がわからな
いんかね、僕を疑ぐるなんて、そりや仲ちゃん、本當に水臭いつていふもんだよ。」
「さう、あなたそんなにあたしの事を思つてゐて下さるの。」

「思ふも思はないもありやしない。ば、ば、僕は仲ちゃんの良人ぢやないか、仲
ちゃんは僕の妻、妻ぢやないか、そんなことは言ふだけ野暮といふものさ。」

「あなた本當？」

「本當も偽もあるもんか、僕は未來永遠に仲ちゃんの良人だよ。」

「ぢや貴夫、どんな事があつてもあたしを捨て無いこと？」

「仕方がないね、今更捨てるの飽きるのつていふ仲ぢや無いぢや無いか、仲ちゃん
が左様思ふのは僕を信じないからだね、僕を本當に愛してゐないからだね。」

と、種長は勢ひこんで言つた。仲子は莞爾笑つて、

「そ、そんな事は無いわ、そんなことは無いわ、愛さないなんて、そんな事はあり

やしないわ。」

「ぢや何故そんな事を言ふんだね、捨てられるの、飽きられるのつて、そそんな餘
計な心配をしなくもいぢや無いか。」

「だつて、あたし、心配な事を訊いたんですもの。」

「な、何を？」

と、色を變じて、

「僕が仲ちゃんを捨てるつてかね、誰がそんなことを言つたのかね。」

「誰が言つたといふ譯ぢやないんですけれども、あたし、ちよつと他から聞き込ん
だことがあるんですもの。」

「は、は、誰かにしやくられたね、僕と仲ちゃんの仲を妬む奴が、きつとあるこ
とないことを言つて仲ちゃんを弄かつたのだらう、そんな冗談を本當にする奴があ
るもんかね。」

「冗談でせうか。」

と、仲子はちつと種長の横顔を見た。その星のやうな美くしい眸には、まだ露が宿つてゐた。

三

海の面は眞暗になつた。そこらに遊んでゐた人々も追々宿に引きあげて行く。この砂濱にはもう二人より他に人の影は少しも見えなかつた。

「本當に冗談でせうか。」

「冗談だとも、冗談にちがひないよ、だが一體何を聞いたのだね。」

「あなたが……」

と、言ひかけて口を噤んだ。

「僕がどうしたつて。」

と、目で促がす。その顔をぶつと眺めて、

「御結婚なさるんでせう。」

「えッ。」

と、ギタリとしたが、忽ちさあらの體を装ほつて、

「な、な、何をいふのだ。」

「だつて、ある人があたしに話して聞かせたんですもの。」

「ある人つて誰だ。」

「誰でもよござんすわ、あなた本當に御結婚なさるんでせう。」

「冗談いつちや困るよ、結婚だの何だのつて、僕はまだ學生ぢやないか、そんなことが出来るもんか。」

「だつて……」

「まして、僕には仲ちゃんといふ戀人があるぢやないか、誰がそんな、そんな他の

女となんか結婚するもんか。」

「でも、左様いふ評判ですから、何とかいふ華族の御姫さまですつてね。」

「その事か。」

と、種長はわざと磊落に、

「それなら根のないことでも無いのさ。」

「えッ、本當でせう、本當なんでせう、だからあたし捨てられるつていふんだわ、

あなたは、あなたは本當にひどいわ。」

と、仲子はしくしく泣き出した。

「困るね仲ちゃん、左様早合點しちや困るぢやないか、僕が本當にその女と結婚するつもりならば、決して茲で仲ちゃんに打ち明けられる譯のものぢや無いだらうと思ふ。」

「え。」

「まあ御聞きよ、誰かト仲ちゃんにそんな話をしたのなら、僕も包まず話をするがね、何有、詰らにいことなのさ。」

「詰らないつて、如何いふんですね。」

「結婚しろといふ話もあつたがね、僕は仲ちゃんといふ戀人があるんだもの、テンから話なんか聞きたいやしない、頭から拒絶してしまつたのさ。」

「左様ですかね。」

「仲ちゃんに黙つてゐたのは悪かつたけれども、それだつて僕があつちに氣があるといふのぢやない、仲ちゃんに話して餘計な心配をさせたつて仕方がないと思つたからなのだ。」

仲子は黙つてゐた。誰かに言はれたのを信じたといふ程の譯でもなかつたけれども、もしやと云ふ疑念もあつたので、ちよいと口に出した迄のことで、言はト口説の「つ」でも言ふべきもの、斯う言はれると、さては左様かと、男の言葉をわけも

なく本當にするのであつた。

「如何したんだ仲ちゃん、まだ僕を疑がつてゐるのかね。」

「いゝえ。」

と、涙をぬぐつて、

「本當にあたしを捨てないこと？」

「勿論ちや無いか。」

「本當？」

「ああ、くどいよ。」

「どんな事があつても。」

と、仲子は力を籠めて言つた。

「馬鹿に疑がふぢやないか、そんなに棄てられたいんなら、いつぞ思ひ切て棄ててやらうか、それがいゝだらう。」

と、種長は笑ひながら言つた。

四

それで、二人は譯もなく仲なほりをして仕舞つた。波打ち際から段々離れて歩つた。海は霧のあいだに、うすく白く光つて見えるのであつた。

「江の島では、辨大様へ仲のいいものが御參詣をすると、別れるやうな事になるものですつてね。」

「何だ下らない、そんな事があるもんか。」

「神様が、嫉妬んで、仲をわけるんですつてね。」

「冗談ちや無い。」

「みんな左様いひますよ、あたしたち、御參詣しなければよかつた。」

「ちよ、ちよ、冗談いつちや不可いよ。」

「あたし、心配になつて堪らないわ、あたしたちは何だか此の儘別れるんぢやないかと云ふやうな気がして仕方がないわ、ああ、本當に御參詣しなければよかつたのね。」

「ちよ、ちよ、冗談いつちや不可いよ、そんなことがあつて堪るもんか。」

「だつて……」

「だつてちや無いよ、今晚はどうしてそんな事を言ふんだらう、仲ちゃん如何かしてゐるんぢや無いかい。」

「どうもしませんけれども、何となく心配になりますから。」

「ちや、どうしても僕を信じないんだね、僕のを信じないんだね、僕を本當に愛してゐるんぢやないんだね。」

と、種長はやゝ激した聲でいつた。仲ちゃんはおろ／＼聲になつて、

「左様いふ譯ぢやないんですけれども、あたし今晚は何故か、馬鹿に悲しくつて、

悲しくつて仕方が無いんですもの。」

「如何かしたんだらう、今晚は本當に變なことはかり言つてる、江の島といふ土地の空気が、仲ちゃんに相應しないんかも知れないから、明日は鎌倉へ行かうかね。」

「ええ、どうしても貴夫のいいやうに。」

「居は氣を移すつてこともあるから、又氣が變るだらう。」

「ええ。」

「だがね仲ちゃん、僕を信じとくれよ、僕はどんなことがあつても仲ちゃんと別れやしないんだから、僕は永遠に仲ちゃんを僕の妻だと思つてゐるのだから、誰が何といはうとも僕を信じてくれ。」

「は、はい。」

と、仲ちゃんはもうすゝり泣いてる。

「たとへ父親や母親が異議を言ふやうな場合があつても、僕、決して仲ちゃんは見

棄てないから、そのつもりで僕を信じておくれ、来年、今時分には、もう大學を卒業するんだから、何が何でも家庭を作る、それまでの辛抱だと思つて、どんな辛いことがあつても辛抱しておくれ。」

「ええ、そりまもうあたし、どんな辛いことがあつても、末を楽しみに生きて行かれますわ、本發にあたし、あたし……」

と、仲子は情が激して、言葉も吃々としてゐた。

「僕だつて……今は如何にも仕方のない學生の身だけれども、なに、もう一年だよ、一年たてば押しも押されもしない學士だ、仲らやんは學士夫人さ。」

「それを楽しみに、あたしも辛抱してゐますけれども……」

と、言つたが、何を思ひ出したか、仲子はさつと顔の色を變じて、

「けれども……けれども……あたしもう家にはゐられないんですの。」

「えッ、何だつて、家にゐられないつて、そりや如何いふ譯なんだね。」

種長は、不意に仲子の顔色が變つたので、吃驚して、心配さうにその顔をのぞきながら言つたのである。

五

「どんなことがあつても捨てない……ねえ、捨てないで下さい。」

「決つてるぢや無いか。」

「本當？」

疑ぐり深いね、先刻から何とそれを言つてるんだね。」

「……」

「そして一體家にゐられないつて、如何いふ譯なんだね、それを話するつもりで、此所へ來たのかね。」

「ええ。」

と、泣きながら首肯いた。

「ちや、話をしやうと云ふのは其のことなんだね。」

「さうです。」

「一體何有？」

「あの……あたし……」

と、口籠る。その顔は眞赤になつてゐる。頬が火のやうに火照ると、仲子は羞恥しげに俯向く。

「どうしたの、黙つてゐちや些とも分りやしないちや無いか……ああ、あの指輪が欲しいのかね、いつか僕が買つてやると言つた、あれなら明日にでも東京へ歸つて買はふちやないか。」

「あら。」

と、仲子は涙に濡れた顔をあげて、怨めしさうに、

「え、そんな指輪が欲しいの何のつて、そんな浮きくした御話ちや無いんですわ。」

「ちや何。」

「あの……あたし……」

と、尙言ひ惜さうにもぢくしてゐる。

ほんのりと、赤く染つた顔を、月の横からさして艶なる風情、袖屏風、戀人をへだて、仲子は羞かしげに、

「……と思ふのですから、如何しやうかと心配してゐるの……」

「何だか分りやしないよ、ちつとも聞えやしないもの。」

「あの……」

と、細い聲で言つたが、それも再び波の音にかき消された。

仲子に黙つて考へ込んだ。そして靜かに歩つてゐる。夕風が白い浴衣の裾をよほ

ると、腫がちらちらと月にはのめくのが、何となく腫めかしく見えた。

「何うしたのさ。」

と、肩を叩かれて、

「あの。」

と、思ひ切つて、

「あたし……京枝さんのやうに妊娠したのぢや無いかと……思ふんですの。」

「えッ？」

と、種長はキョツとして胸をつかれた。そして我にもあらず、立ち停つた。

「左様か、いや左様だつたかね。」

と、ため息をついたが、わざと晴々した顔になつて、

「どうせお互ひの情交なんだもの、そりや有りがちのことぢや無いか、そんな事を心配しておちやお互に戀の夢は見られやしない、いいよ、心配するには及ばないよ

僕、ちやんと心得てゐるよ。」

と、事もなげに言つた。こんどは仲子の方が心配さうに、

「さうですか。」

「大丈夫、僕に任しとくさ、僕の子だ、僕の子だ、僕が始末するよ。」

「始末つて？」

と、仲子は不安さうに見た。

冷やかな風が、海の上から吹き上げて来て、浴衣がけの仲子の肌、しみじみ冷たく沁みだした。

六

種長は笑ひながら、

「大丈夫、心配しなくもいいよ、何も始末をするつて言つたところで、随すの何●

といふそんな恐ろしいことぢや無いんだ、心配しなくもいいよ。」

「そんな事を心配しやしませんけれども。」

「それで人目につくから、羞恥が悪くつて家にゐられないつて言ふのだらう。」

「ええ。」

と、羞恥わるげに俯むいた。

「僕だつて、僕の最初の血をわけた子なんだもの、ましてそれは愛する仲ちやんの腹に宿つた子だもの、生れぬ先から、嬉しさに躍るやうな氣持がする。」

「ああ、あなた左様思つて下さつて？」

「勿論、左様思ふのが人情ぢやないか、左様思はない親はあるまい、仲ちやんだつて左様ぢやないか。」

「あたし、如何したらいいか、そればかり心配して……」

「心配するのも無理はないが……左様聞いちや何時まで此所で遊んでる譯には行

かない、とにかくわれ〜二人の間に生れる子の家を拵らへなくちやならないから、早速東京へかへらう。」

「家を拵らへる。」

「さうさ、家を持つたさ、仲ちやんと僕と家庭をつくるのさ、たとへば人の家の二階でも何でも構はない、とにかく今までのやうに下宿もしてゐられないし、仲ちやんだつて叔父さんの家に厄介になつてる譯にも行かないんだからね。」

「左様して戴けば、あたしも安心ですわ。」

と、仲子はホツとしたやうに胸を撫でた。

「もう歸らう、そんな身體になつてるんぢや、こんな海岸で夜風に當るのはよくない、さあもう宿屋へ歸らう。」

「ええ。」

と、逆らはず、温順しく袖を揃へて歩き出した。

潮の寄せてはかへす音が、娘の痛みやすい、狂ひやすい胸の聲かと思ふばかりに耳朶に響いて来た。

仲子は魔物に脅かされるやうな心持になつて、そつと後を顧みる。月は雲の間にかくれて、海の面は黒く暗く躍つて居た。

「あなた。」

と、ばかり、身ふるひして種長の袖にとりすがつた。海は物凄く程高く叫んでゐた。墨い雲が出て、風が變つたのだ。

四の袖が、海を放れて段々遠ざかつて来たときに、向ふから、海の方をさして歩いて来る人の影があつた。すれ交ひざま、暗にすかして見て、

「あゝ君、田村君ぢやないか。」

「エッ？」

と、種長はギョツとしたが、すぐ落ちついて見かへして、

「ああ、中旗君か。」

「今日、たつた今来たのさ。」

と言つて近寄つたのが、種長とは無二の友人で、中旗千代松といふ男。仲子がゐるので、ちよつと面くらつたといふ風で、あとさきを見廻した。

「急に君に話したい用があつて来たんだが、ええと……」

と、仲子を見た。何の話か知らぬが男同志の間に、他聞を憚ることもあるだらうと、仲子は氣を利かして、

「あたし、お先に行つてますわ。」

と、會釋して去つた。

あとには男二人の影、波の音は寂しく、海の面は暗かつた。千代松は眉を潜めて、仲子の後姿を見送つてゐた。

男ごゝろ

簾々として海が鳴る。種長と千代松はしばらく押しふせたやうに沈黙を守つて、海の鳴る音に耳を傾けてゐた。夜風がしつとりと浴衣の袖にからみ付く。

「用つて何だい。」

と、やゝあつて種長が夢のやうな瞳をあげて訊いた。

「僕の用はとにかく、君、今の女はありや一體何だね。」

と、千代松は詰問するやうな調子で手きびしく攻めかける。

「あれか。」

と、面伏そうに俯目になる。

「困るぢや無いか君、君の將來の立身出世の端緒も開けやうとする場合に、あんな正體も知れない女を引ばつてさ、それも狐鼠々々遊びならとにかく、此の人の入り込む江の島くんだけへ、公然で出かけて来るなんて、仕方がないぢや無いか。」

「ウン、左様言はれると一言もないが、決してそんな曖昧な女ぢやない、良家の處女だよ。」

「尙いけないよ、曖昧女なら如何にでもなるが、良家の處女となると、尙更面倒ぢや無いか。」

「ウム。」

と、種長は赤くなつて俯むいた。

二人はとある岩の上に腰を下して、海の音、波の叫びを訊きながら、しんみりとした調子で尙話を續けた。ひた／＼と寄せてはかへす波は、動すんだ色に光つてゐた。

「彼女が何者の娘でも、それは僕の知つたことではないんだ、僕は友人としての立場から君があつた女と早速手を切るのを望むね。」

「何故？」

「君の將來のためにさ、君一身のためばかりぢやない、君の一家、君の弟妹、君の御両親のためにも、君があつた女と關係してゐるのは悲しむべきことだ。」

「それは勿論さうに違ひないが、然し今更あつた女と手を切るつて譯にも行かないんでね。」

「だが然し、何時までも今の關係を續けてゐたんぢや君の身の破滅だぜ、君が破滅すりやあつた女も破滅する、二人一所に破滅するより君一人でも助かつた方がいぢやないか、それがやがて、君のためでもあり、あつた女のためでもあるかも知れないよ。」

「左様いふこともあるかも知れないね。」

種長は考へ込む。始終叱るやうな調子で言ひながら、千代松は、落ちついた顔に皮肉らしい微笑をうかべながら、袂から敷島を出して、種長に勸める。

「燐寸をすると、青い火がばつと暗い海の面をてらしたが、煙草につけるまでもなく風に吹き消されて仕舞つた。両手で圍つて、やうやく三本目で煙草につけてうまさうに煙を吹く。火が、吸つたり吹いたりすることに赤くなつたり、光が薄くなつたりしてゐる。」

「とにかく、今は君にとつては成功不成功の分岐點なんだから、此の際大に自重して貰ひたいね。」

「ウン。」

「新華族として實業界の大業者としての白井松五郎さんが、その愛嬢を婚合せやうといふ相談が持ち上つてゐるんぢやないか、その際、こんな所へ女を引ばつて来て大に困るぢやないか。」

「……………」

一體白井男爵への返事は如何するんだい、拒絶するののか、それとも承知するののか何時迄もあやふやにされたんぢや、間にたつた僕が困るばかりだ。」

と、千代松は辨じ立てる。

二

種長は思ひ迷つた。美くしい仲子と別れるのは残り惜しい。さりとして一寒の貧書生が、實業家の男爵白井松五郎の令嬢を妻にするのは、願ふでもない好機會、それも此方から申込んだのではなくつて、彼方が乘氣だといふのだから、持つて來いである。

白井のやうな實業界の有力者の娘を妻としてゐれば立身も出世も思ひの儘なのだから、取り逃すのは残念である。といつて美くしい仲子の情も捨てがたいと、心は

千々に思ひ迷ふのである。

「どうするんだ君、何とかしつかりした返事をしてくれ給へ、むかふぢや急いでるんだからね。」

と、千代松は又しても催促する。

「如何つて、僕の考へは初から決つてるんだが、然し、正直に言へば、どうして仲子と別れやうかと云ふことを心配してゐるんだよ。」

「フフン、それが本音だね。」

と、千代松は皮肉に笑つて、

「實際、青雲の機會だからね、僕も君のために大に惜しむのさ、だが、君がさういふ心持でゐるなら、何、譯はありやしない、僕が何とか女の身の始末はするよ、とにかくも僕に任せてをき給へ。」

「だがね、餘り露骨なことをして、あとで恨まれるやうなことがあつても困るから

ね。

「馬鹿な、そんなことを心配してゐて別れられるもんか。」

と、千代松は烈しく叱るやうに調子で言ふのである。

「だが、仲子といふ女は……」

「けれども然し、捨てられない程いい所があるかね、吉原の妓様に、は、は、は。」

「……………」

「そりや、君にとつては初戀でもあるし、向ふも君一人を頼みにして生てゐるのかも知れないが……………」

「さうだ、僕にもあの女にとつても初戀なんだ、そしてあの女は、廣い此の世の中に僕一人を頼りにして生てゐるんだ。」

「女の初戀などいふものが長く續くものか、君と別れりあ、もうそのあくる日から他の男と戀に落ちてゐるよ、心配することはない、別れ玉へ、別れ玉へ。」

「あの女は、僕より他に頼みの綱はないんだ、此の廣い世の中に……………」

「だつて、父もありや母もあるんだろ。」

「その両親の家にもゐられない事情があつて、今ちや叔父さんの所に世話になつてゐるんだがね……………」

と、種長は惱ましげな眼を伏せた。

「ちやその叔父さんの家におればいいさ、君と別れて、すぐに其の日の生活に困るといふ譯ちや無いんだから、別れるたつて世話はないさ。」

「所がさうも行かないでね。」

「何、大丈夫だよ、もし叔父さんの家におられなけりや、すぐにまた他に君のやうな頼もしさうな男を見付るよ、それが今の女の人情さ、何さ、そう心配したもんぢや無いよ。」

「君はその傳で何人も戀人を拵へて、そしてその戀人と別れて來たんだが、僕にや

「どうも左様いふ氣にはなれないよ。」

「は、は、は、何、それも初めのうちさ、最初の女に別れやうとする當座だけさ、あとは何、何でもないよ、男だつて女だつてそこに異ひないよ、濡れぬ先こそ露をも厭へさ、濡れつちやつたら何、袖や裾だけぢやない、腰まで浸そうが、首まで濡れやうが何でもなくなるものさ。」

と、千代松は勢ひに乗じて述べ立てるのであつた。

三

あたりはもう眞暗になつてゐる。風が潮を帯びて、袖にも裾にも、うすら冷たくからみ付く。肌も骨も濕ぼくなるやうな氣持がする。

「なる程、今の女は美人だよ、白井男爵の令嬢から比べたらそりやいく段か立ちまさつた美人かも知れないが、然しあの女は、果して學士としての君の夫人たるに恥

かしくない教育と素性を持つてゐるかい。」

「そりや氏もよくはない、教育もないかも知れないが、その愛情………」
と、云ふのを千代松は手をあげて打消した。

「は、は、は、何の愛情呼はり、親の目をかすめて男を愛する女の愛は猫の愛だ、もつとも、そりや、君からしかけたか女から言ひよつたか、そりや僕の知つたことではないが、男から言ひ寄せられたからと云つて、身を任せるやうな娘ならば、亭主の目をかすめて色男を拵らへないとは言へないせ。」

「そりやひどい、あの女に限つてそんなことは無い。」

「そりや無いよ、今は無いよ、けれども長い將來には保證は出来ないよ、すでに親の目をかすめて君に身を任せた、更に君の目をかすめて他の男に身を任せないとは言はれないよ。」

「場合がちがふ、親と亭主ではその心持ちがちがふ。」

「何、五十歩百歩の差さ。」

と、千代松は一も二もなく言ひ消して、ちつと種長の顔を見て、

「それはそれで打ち切りとしてさ、最初に言ひかけた愛情といふことを論ずるならばだね、白井男爵の令嬢壽美代さんの君を愛する愛情だつて、恐らく今の女に勝るとも劣りはすまいと思ふ。」

「さうか。」

「馬鹿に氣のない返事をするぢや無いか、何しろ五千萬の財産家で、男爵の令嬢で一介の貧書生たる田村種長君を戀するのだから、如何に君を愛するかは考へる迄もないぢや無いか。」

「さうか、ウン。」

「ましてや、その愛嬢を君にゆるさうといふ白井男爵の……何といふかね、所謂知遇とでもいふかね、その知遇に對してでも、君は二つ返事でこの結婚を承知しな

くつちやならないよ。」

「ウン、それは感謝してゐる。」

「君に社會的地位があつて、すでに相當の手腕が世に認識されてゐるならばとにかく、一介の書生たる君を令嬢に婚せやうといふんぢやないか……勿論これは君が銀時計の候補者だからにもあるだらうけれども、然しその最愛の令嬢を呉れやうといふのは、大に君の才を未前に認識してゐるからだ。」

「さうだ、いや左様かも知れない。」

「左様とも。」

と、力をいれて、

「だから君も、此の際白井さんの申込に應じてさ、大學を出る勿々、大にその手腕を奮ふべきぢやないか、腕があつても、才があつても、これを使ふべき人がなくつちや何にもならないよ、これを引き立てゝくれるものが無くつちや、手腕はあつて

も無いに如かないぢや無いか。」

と、千代松は熱心に説いた。

種長は尙決しかねる體で考へてゐた。さすがに初戀も捨てかねるし、さうかと言つて、折角の好運を取り逃すのも残念に思はれたのである。

潮は高く鳴る。魔の聲のやうに鳴る。戀人同志の嬉しい仲を割くやうな、恐ろしい聲で鳴る。

四

「どうだ、何とか考へ直したかね。」

と、やゝ少時あつて、千代松は笑ひながら訊いた。

此ういふ場合には、男にとつては戀よりはむしろ功名である。種長はそれをおもつてゐた。

戀を捨てやうか、功名をとらうか、それは勿論功名である。ことに仲子に劣らぬ美人の壽美代を妻にすることが出来るのだから。

然し、仲子に對していく分相濟まないやうな氣もする。あれだけの女を惜しいとも思ふ、そしてたゞ一心に自分一人を力としてゐる女の哀れにも痛々しい心持を思ひやると、どうしても捨てられない。無情な仕打をするのが何となく痛ましい。

ことに女は妊娠してゐる。自分の胤を宿してゐる。自分といふものの生命の別れである。どうして無常に棄てられやう……とは思ふが、その子をどう處理しやう妊娠したこの戀人を如何しやう。仲子からそれを訊いた時には、兩親を説いて、仲子の叔父の方へも言つてやつて、是が非でも結婚するつもりでゐた。そのつもりで仲子にも東京へ歸つて家を持たうと言つただけでも……

恚うして千代松が白井男爵からの話を忙込んで来るやうならば、兩親の方へも言つたに異ひない。兩親にいへば、それは白井の方の縁談を望むのは知れ切つた話だ

それに背いて仲子と結婚すれば……學資は出なくなる、折角やりかけて來年は卒業といふ大學も途中で罷めなければならぬやうな破目になるかも知れない。それは残念だとも考へる。いつそのこと仲子を棄てて白井の娘と結婚しやうか、仲子とも別れず、白井の方も謝絶らずに濟むやうな方法は無いものかと、虫のいいことも思ふのだ。

千代松は黙つて種長の考へこむ顔を見てゐる。そして煙草を出して、スバ〜と吸つて居る。それをまた無言の儘で見かへしながら、種長はいよ〜深い考へに沈むのであつた。

「どうする。」

と、しばらくして千代松は言つた。

「ウン。」

と、顔をあげて寂しげに笑つて、

「仲子とも別れず、白井の方も都合よくといふ方法はないものかな。」

「そんな慾の深いことを言つちや不可いよ、元來戀と功名とは兩立するもんぢやない、有爲の人間が、空しく陋巷に朽ち果てるのは、古々戀といふ美しい名のためなんだ。」

「戀か戀か……戀と功名……か。」

「何れといへば、男子須く功名をとるべしだ、一婦人の愛に溺れて一生を棒に振るのは、徳川の末期の思想だ、そのために徳川氏は亡びた。」

「然し、それも美しいぢや無いか、君とねようか五千石とるか、儘よ五千石君と寝よ……だ。」

「馬鹿なッ。」

と、千代松は大喝した。

「そんな事つてあるものか、そんなことを考へられて堪るものか。」

「ちよいと左様思つただけだ、さう怒るな。」

「君はまだ前途のある學生だ、僕は友人としても一婦人のために將來を誤らせたくない、それだから忠告もするのだ。」

「有り難う。」

「戀も女も、金があつてからのことさ、金さへあれば、どんな女だつて自由になるんだ、考へ直せ、考へ直せ。」

と、千代松は言つた。海も空も暗かつた。

秋の曲

目にこそ定かには見えね、桐の一片に秋が来て、朝夕に吹く風が、肌につめたく泌みる頃となつた。

本所は厩橋に近い番場町の、とある荒物屋の二階を借りて、ここをしばしの假住居、田村種長と小川仲子は楽しい甘い戀の夢を見續けてゐた。種長は本郷の下宿を引きはらつて、仲子は叔父の家を出て、以來は知らず、今はたゞ顧みるのも嬉しい月日を経て来た。

「やあ。」

と、荒々しく聲をかけて、階段を上つて来たのは、その友人の中旗千代松であ

る。仲子は用達に出たのか、そこには居合せなかつたのである。

清しい眼を眩しさうに動かして、種長は立つて座蒲團をすゝめた。千代松は會釋もなく胡座をかいて、袂をかき探つて煙草を出しながら室の内を見廻した。

『どうしたと云ふのだ。』

と、聲も態度も荒々しい。

『ウン。』

と、眼をまたも忙しさうに動かして、面目なげに俯むいた。

『どんなに探したか分りやしない、突然に下宿を引きはらつて、僕の所には一言の挨拶もないんだからね。』

『どうも相濟まん。』

と、頭をかいて、

『實に申譯もないが、そこには言ふに言はれない事情があつたものだから、それで

何さ、どうか悪く思はないでくれ給へ。』

『事情はたいがい分つてるさ、言ふに言はれないと云ふ事情も僕は知らないではない、無論、仲子さんのことに就てだらう。』

『ウン、左様だ。』

と、羞恥悪けに首肯く。

『話らないことをしたものだ、一體どうしやうと云ふのだ。』

『それで實は相談しやうと思つて、御來駕を願つた譯なんだが、あんなに言つてくれたのを斷りもなく身をかくして、今になつて困るからつて相談しやうとするのは餘り自分勝手だが……』

何さ御互ひに困る時に助け合ふのが友人の情だ、そこに眞の友情もあらうといふものぢや無いか。』

と、千代松は、してやつたりと思ふ色を顔にも見せず、さりけ無い體で言ふので

ある。それに力を得て、種長は、

「有り難う、左様いつてくれるのは君ばかりだ、有り難う。」

と、聲を曇らせた。

「それで如何しやうといふのだ。」

と、熱心に言つて膝を乗り出すと、種長は今更の如く躊躇つて、俄かに顔を伏せて言ひ過ぎる。それをちつと見て微笑みながら、

「とにかく如何にも斯うにもならないから、女と別れて仕舞ひたいと、斯ういふ話なんだね。」

と、千代松は言つた。

物は言はなかつたが、赤い顔をしながら首肯した。日に日に短くなる秋の日足、うす赤い日光が古びた障子にさしてゐた。その日が雲にかくれたのか、室内は急に暗くなつて、窓に近い木の葉を吹く風の音が、秋の曲かとうら寂しくも耳朶を打つ

のである。

「今になつて別れるなんて、左様ことは言へた義理でもないし、その相談を君にするといふのも羞恥の悪い話だが……」

「まあいい、それはもう良いよ、羞恥の悪いの、身勝手のと云ふことは、もう訊かなくもいいから、君のその相談といふのを早速承らうちや無いか。」
と、言ひながら、千代松は袂から煙草を取り出した。

二

種長は、悠々切り出されて、又しても言ひをくれて寂しげに肩をゆすつたが、思ひ出したやうに煙草盆を持つて来て、自分もそこにあつた呑みさしの煙草の袋をさぐる。その音がカサカサと鳴るのも氣のせいか寂しいと思つた。

「君があれ程言つたのだから、別れるならばあの時別れ、ばよかつたのだが、そこ

には其所の事情があつてね。」

「事情とは？」

「それが。」

と、赤くなつて。

「あの女は……その時妊娠してゐたのでね、どうもそれを振り棄てるといふことは、情に於て忍びなかつたのだよ。」

「左様か、ウーン。」

と、太く濃い眉をびくりと動した。

「それでね、斯うして此那所へ引き移つたのは、自炊でもして儉しく暮してゐたら何一年そこくの月日だ、僕の學資のうちで濟んで行くと思つたのだがね。」

「所がそれで追付なくなつたのか。」

「いや、左様ぢや無いんだ、とにかくやつて來られのさ、それであの女も將來を

樂しみにして随分辛いことも我慢して來たのだが、今となつちや、それももう水の泡だつたのさ。」

「フウン、何故。」

「僕がこんなことをしてゐるのが、田舎の父親に知れちやつてね、父親が大變に怒つちやつて、親がりの學生の身分で生意氣な奴だ、そんな不都合なことをするものは、とても末の見込はないから學資は送らない、勝手にしろ——と斯う言つて來たのだ。」

「そりや、御親父のいふことに間ちがひは無いと思ふ、僕らが考へても左様だ、親がりの學生の身分として女と同居してゐるなんて、言語同斷だ。」

「それは一言もない、僕も初めに事情を打ち明けてをけばよかつたのだが、それをしなかつたのが悪かつたのさ。」

「それで、如何したのだ。」

「爾來、父親からは一文も學資を送つて來ないのだ、初の内は何、どうにでもなるといふ心組で、仲子が縫物をしたり、僕も内職などをして、足りない所は質を置いたり、本當にひと工面を暮して來たが、今ちやもう如何にも期うにも仕方がないんだ。」

「そりや仕方がないよ、君、親に背いた罪の當然の報酬だ。」

「何と言はれても一言もないが、何、僕だつて生活するだけなら、女房や子供の一人二人どうにでもなるが、如何せん學校といふものがあるのでね、思ふやうには働けない、働けないから生活にも困るつていふやうな譯で、今では身動きも出來ないんだ。」

「フーム。」

「食ふや食はずで此の儘のたら、此の末如何なるのだらう、二人とも餓死して仕舞はなければならぬ。」

「儘よ五千石、君よ寝よ………といつたぢやないか、一所に死ぬだけの意氣もなくなつたかね、はゝゝゝ。」

と、千代松が笑つたのを、怨めしさうに眺めた種長は、

「學校をやめて仕舞つて、生活の道を講ずるなら、何、餓死しなくも、心中しなくも濟むのだが、折角此所まで漕ぎつけて來たのを、それも残念だからなあ。」

「おれも残念だと思ふよ。」

「仲子だつて、利かない氣で、何、あなたの學資位あたしが拵へますつて言つてるが、もう君、妊娠六月だ、何が出來るもんだ。」

と、寂しく言つた。

千代松はにや〜笑ひながら、種長の告白を聞いてゐた。

「それで僕に相談といふのは、一體どういふことなのだ。」

と、千代松はゆつたりと煙草を吹きながら、紫に立ち迷つて、天井裏を這つて何所ともなく消えて行く煙の行方を眺めながら、熱心に耳を傾けてゐるのである。

「どうしたらいいか、僕も考に迷つてゐる、君に逢つたら、又何かい方法もあらうかと思ふのだが……」

「まづ方法はないね。」

「えッ？」

「いえさ、君が仲子さんと別れるより外に方法はないと思ふね。」

「……………」

無言で煙草を吹かしてゐる。

「それより他に方法はないよ、失敬だが今君が自白するやうな状態ぢや、おそかれ早かれ餓死するか、心中するか、この二つより他に道はないんだ。」

「ワン。」

と、惱ましげに額をおさへた。

「將來爲の君だ、とにもかくにも大學の最上級生だ、さう云ふ事情がなくつても、生活には困らなくつても、女と別れるといふことは最善の手段だらうと思ふ、女と一所にゐると云ふことは、普通の學生としてもあるまじき事だと思ふ。」

「さうだ。」

と、がつくり首肯く。

「若氣の誤りだ、誰でもあることだ、過去は過去として、今迄のことは潔く思ひ捨て仕舞ふさ、その位の勇氣と決斷がなくつちや、今後この競争の烈しい人生の勝利者となることは覺束ないと、まあ僕は思つてゐるがね。」

「……………」

「たかト一婦人と別れられないやうなことぢや、とても大事業は出來ないと、僕は

「憚りながら思ふね。」

「そりや僕も考へてゐる。」

「ここらが時機だ、手切れ話を實行し玉へ、ここで一步を誤まつたら終生恢復は出来ない、君ばかりぢやない、仲子さんだつて悲しい目に逢はなきあならないんだ、思ひ切つて別れ玉へ。」

「ウン、それが……どうも……」

「そりや別れにくいさ、だが、君が心配する程のことはない、親に背いて家を出て君と一所になつてる位の女だから、案外さつぱりしてゐるかも知れないぜ。」

「さうだらうか。」

「よし又左様でなくつても、利害を説いてしばらく別れてゐるつていふやうなことにするさ、それを、何所までも厭だといふのなら、そんな理も非も分らないやうな女なら、文句を言ふことはない、それを理由にして別れて仕舞ふさ。」

「だが、僕にや、どうしてもそれが言へない、面とむかつてそんな薄情なことは言へない、何となく可哀想ぢやないか。」

「意氣地のないことを言ふな、それが禾裏の仁といふのだ。」

と、はげしく叱咤して、

「君があの人と別れさへすれば、君の御両親だつて是迄通り學資を呉れるだらうし、君も安全に大學を卒業することも出来るよと云ふ譯ぢやないか。」

「フーム。」

「もし又、御両親が不安に思ふといふのなら、及ばすながら僕が仲に立つて證明してあげてもいい。」

と、千代松は微笑しながら煙草をふかしてゐる。種長は、双の腕を組んで、悄然として聞いてゐたが、やがて沈んだ顔をあげて、ちつと千代松を見た。

「それで、別れるとしたら、如何いふ風にしたらいだらう。」

と、重い口を開いた。

四

「どうつて、そりや空手で出るといふのも情として忍べないから、何圓か金をやるさ、所謂手切金だね。」

「ウム。」

と、厭な顔をして眉を潜めたが、然し今の場合、それより他に方法はないと思ふと、如何でも友人の言葉に従はねばならなかつたのである。

「金は、僕が都合しやう、これくだと事情を打ち明けて君の御親父から貰つてもいいし、又他に目的がないでもないから、君が、いよく仲子さんと別れるといふのなら、僕の手で拵へやうぢやないか。」

「さうか。」

「仲子さんに直接いふのが厭だといふなら、僕が言つてもいい、然し、それでも、君が卒業するまで待つてゐるとか、金はいらないとか、別れたくないとか言はれると面倒だから、去りげなくあしらつて置いて、黙つて逃げるのさ。」

「逃げる？」

「さうさ、面とむかつて言ふが可哀想だといふなら、無断で逃げるより他に方法はないぢやないか。」

「何だか卑怯だな。」

「何の、此の際卑怯だの、可哀想だの、人情だのつて言つてられるものか、あの人と別れるか否かは、君の死活に關係してゐるんだ。」

「仕方が無い、逃げるか。」

と、寂しい。

「心配するなよ、仲子さんだつて君と別れてゐりや、ほれ、またすぐに代りをこし

らへらアね。」

「そんな女ぢやない。」

「どんな女だつて、別れられないの、死ぬの生るといふのは當座のことさ、何、長い目で見玉へ。」

「左様かなあ。」

「左様とも……それに君、今の内ならまだ例の白井男爵の方だつて如何にでもなるんだよ、君が病氣なので、急に返事は出来ないやうに言つてあるのだから。」

と、微笑みながら言つて、

「君の御兩親もうすくは御承知のやうだつたせ。」

如何してそんな事を千代松が知つてるだらう。千代松が兩親を知つてる譯はないかと、種長は不審に思つた。

「君はどうして僕の兩親を知つてる。」

「はう。」

と、事もなげに笑つて、

白井男爵の使命を帯びて君の小學、中學時代の成績や素行を調べに、わざ／＼君の郷里へ行つたんだもの、その時、君の御兩親にも他ながら御目にかゝつて来た。」

「さうか。」

と、言つた儘口を噤んだ。

さては、仲子との件も、此の男が言つてやつたのかも知れない。恐ろしい友人だ。然し自分のために悪かれと思つてするのではないのだから、答むべき點は些ともない、種長は何にも言はないで腕を組んで天井を仰いだ。

その時、階下に花やかな笑ひ聲がして、やがて階子段を上つて来る音がした。二人は顔を見合せた。種長が寂しい笑を洩した時に、靜かに襖をあけて、美しい姿を見せたのは仲子であつた。

「唯今」

と、しとやかに、留守の間にこんな恐ろしい相談があつたとも知らず、崇爾と笑つて見せた。窓を吹く風が、悲しい秋の曲かとばかり響く。

名残の唄

釣瓶落しの秋の日は、西の空を眞赤に染めて、吹きまく風の、葉枯れた柳をなぶつて何となく秋めいた夕ぐれ頃、仲子は一人で歸つて來た。

「女房さん、只今。」

と、聲をかけて室内をのぞいた。

中はもう薄暗くなつてゐたが、まだ電燈のスイッチもひねつて無いので、何となく

微臭く見える荒物屋の店前を、仲子は構はず中へ入つて行つた。

勝手の方で何かゴタ／＼水仕ごとをしてゐる女房さんは、折ふし水道の栓をひねつてあつたので、水の音がちや／＼してゐて、仲子の聲を聞きつけなかつたか、丸鬚を振り立ててゐたが、返事をしやうともしないのであつた。

然し、今日一日に限つたことでは無かつたから、仲子はためらはず、薄暗い階子段を上つて、二階の座敷へ入ると、すぐに電燈のスイッチをひねつた。

さつと灯影が流れると、汚ない室も急にあかるく榮えて見える。押入の襖の花模様がちら／＼光つてゐるのに、仲子の黒い影が映つて美しい。疲れたらしく机に身を凭せてため息をついた。

しばらく、物も言はず恍然と外を吹く風の音を聞いてゐたが、やがて立ち上つて着物を着換へやうとして、羽織の紐を解きながら、見ると、何となく室内の内が片づいてゐる。

時に、女房さんが、臺重に火種をいれて持つて来た。

「おや、お歸りだつたのですね。」

と、莞爾して火種を火鉢にうつしながら、

「御一所下や無かつたんですか。」

「ええ、あの人はちよつと友人の所に用があるつて、吾妻橋で別れて来たんですの、もう間もなく歸るでせう。」

と、火鉢の前に座つて、そこにあつた炭箱を引きよせて、物憂さうに炭を次ぐ。

女房さんは臺重をそこへをいて座りなほして仲子を見た。

「ねえ、奥さん。」

「えッ？」

と、火箸ををいて女房さんを見かへす。

「今日ね、お留守に中旗さんつて方が入来しやいましたよ。」

「ああ、あの方。」

と、何にも知らない仲子は、仰山らしい女房さんの改まつた言ひ草を、解せぬらしく微笑した。

「そしてね、荷物を持つて行きましたよ。」

と、女房さんは火鉢のそばへすりよつて物々しさに聲を潜めた。

「荷物？」

「ええ、左様ですよ、あの方が預けといたんですつて左様仰有つて、行李と、本箱をね、貴女、御存じないですか。」

「左様ですかねえ。」

仲子は只さりげなく言つた。湧きかへるやうな胸の思をかくして、

「私、知りませんが如何いふ譯なのでせう。」

「何でもあの方が旦那様に預けてをいたんですつてね、もつとも昨夜、あなたの御

留守でしたかね、あの方が入来た時に、旦那様が左様仰有つたんですよ。」

「へエ、何を言ひましたか。」

「あの、此の人があした荷物をとりに来るが、それは此の人のを預かつてをいたのだから、誰もゐなくつても遠慮なく渡してくれつて、さう仰有つたものですからね、あたしも其のつもりで御渡し申しましたよ。」

と、女房さんは仲子の顔色をうかやひながら辯じあげた。

二

「左様ですかね。」

と、言ひながら、仲子は立つて押入を見た。そこには果して行李が一つ失はれてゐた。心づいて見ると机のそばにあつた本箱もなかつた。

はつとして、今更のやうに驚いたが、然し種長が言つたといふことだから、什麼

いふつもりか、ともかくも歸つてからのことと、さりげない體を装はつて寂しく微笑しながら、

「左様ですかね、ちや何か私に内所であの方に借りたものがあつたのでせう、随分仲のいい友人だつたのですから。」

と、言つた。

「左様かも知れませんかね。」

と、女房さんも笑つた。

「歸つてから訊けば分りますわ。」

「左様ですね。」

と、腰をうかして、そこにあつた湯沸を持って立ち上り、

「御湯を持って来てあげませう。」

「有りがたう。」

と、言ひながら、もう階子段を下りてゆく女房さんの足音を聞いてゐたが、ふと火鉢を引きよせて手をかざした。

夕ぐれの冷たい風、障子のすきから吹き込んで、身重になつてゐる仲子は何もなく寒さを感じて、肩をすばめて火鉢によりかゝるのであつた。

「はい、お湯を。」

と、女房さんは階子段から首だけ出して、湯沸をそこへをいて、

「それから、手紙が來てゐますよ。」

と、いつて降りて行く。

「有りがたう。」

と、物憂さうに立つて、頬にはらりと亂れかゝる後れ毛をかきあげながら、湯沸をとりながら、片手に手紙を見ると、思はずはつとしてそこへ座つて仕舞つた。

宛名は小川仲子様、裏には名はかいて無かつたが、その手蹟は何所やらに見覚え

があつた。思はず知らどギョツとして胸の動悸のはげしいのに氣がついた。自分が此所に憊うしてゐるといふことは、誰も知つてゐるものはない。それだけでさへも手紙が來る譯はないのに、それは見覺のある手蹟だから、はつとして胸を壓されたのである。

電燈のそばへ寄つて、其のふくよかな前髪を笠に觸れるばかりに、その手紙を読み初めたのである。淡墨の走りがきを、すら／＼と五六行讀むと、顔の色が急に變つて來て、手紙を持つてゐる柔らかな指がふる／＼とふるえる。讀んでしまふと、机の上に突伏して、手紙に顔をすりあてて泣いた。

「逃げられた！」

と思ふと、口惜しさに胸がイラ／＼して來たのである。

この身體で、遊びに出かけるのも厭だといつたのに、強いて連れ出したのは、さては憊うした淺ましい針砦があつたからなのか、そして友人の所へ寄つて來るからな

どと、抜け／＼とよくも言ひこしらへたものだ。淺ましくもまた頼りない薄情な男の心ではある。

「こんなことなら、初めから左様いつてくれりやいい、今となつて餘りだ、餘りだ。」

とばかり、涙は泉の湧くやうにはらり落ちるのである。

イラ／＼しく立つて、よろめくやうに窓の際によつた。さつと障子をあけると、そとはもう眞暗で、大空は銀砂子を散らしたやうな星の光、白く流れる天の川を、吹き渡る風はひえ／＼と肌に沁みるのである。

空を仰げば流るゝ涙、流るゝ星、心も風もつめたいと、男の無情が身にしみ／＼と怨めしかつた。

三

貧しい家に育つたので、生れ落ちると間もなく、比較的高める叔父叔母の手許に引きとられて、その後の何年かを楽しく過して来た。その叔父叔母を捨てて、たよつた男は此の無情さ。

しばらくは言ひしらの快樂に酔うて、多岐の胸に、若い血汐の漲つたのも幾度あつたか、そして男の胤を宿して、死すとも此の戀すてじと、ひたぶるにより纏つたのに、ああ今は無情くも棄てられたのだ。

「如何しやう、如何しやう。」

と、身をもたえる。黒い髪の亂れ、心の亂れ、雪かど見疑ふその美しく白い肌、残るは仇し男の生命の一滴——そして悔と汚れと悲痛とである。

「これから如何しやう。」

と、行末は思ふも恐ろしい、言ふも恐ろしい、覺えず手足が戦慄する。

暗い罪の海へ落ち込んで行く身の悲しさ。胸も心も張りさけるやうだ。たゞひた

すらに力とたのみ、杖とよりすがつた人に逃げられた思ひは、道もわからぬ深山路
 を行く旅人が、たゞ一つの光明であつた明星に不圖消えられたそれにも増して辛く
 果敢ない事であつた。

「私が馬鹿なんだから仕方がないけれども、あの人も男らしく無い、別れるなら別
 れやうと言へば……」

ああ、さりとて今更別れられやうか、身はこの醜くい姿だ。男の嵐を宿して人中
 へは顔出しが出来ないのだ。叔父さんの所へ歸つてゐて、時節を俟てといつたとこ
 ろで、この醜くい身體でのめくくと歸つて行かれやうか。まして、生の父母とは幼
 ない昔から縁は切れてゐる……

失望と、怨恨と、困却とに、胸は鋭利な小刀で貫ぬかれるやうに痛い。頭は鐵の
 槌で叩かれるやうに患める。

困るなら困ると言つてくれたらいいぢやないか、藝者をしたつて奉公をしたつて

學資位はこしらへますつて、いつも言つてゐたのぢやないか。それなのにこんな卑
 怯な欺し討みたいなことをして、男らしくもない。そんな人とも知らずに身を任せ
 たのが口惜しいと、窓に身をよせてさめくと泣く。

暗い空からは風一陣、大川の瀬の音が鬱々と響いて、枯葉の梢がさらりと鳴る。
 廂を流れる露しつとり冷たく、何所やらでこほろぎが啼く。遠い慮のない、輕は
 づみな心を嘲けるやうに啼く。

いたく激した情が、やがて静まると、仲子は、襦袢の袖に涙をぬぐつた。瞳を轉
 じて外面をながめたが、その儘をくれ毛をかきあげて、つと窓を離れたのである。

「どうしたのでせう、馬鹿に遅うござんすわね。」
 と、階下の女房さんが階段の所から聲をかけた。

「左様ですね、何か話し込んでゐるんでせう、男同志、酒でも出て、何所へ浮かれ
 出したかも知れませんわ。」

と、さりげ無く言つて、寂しく笑ひながら顧みた。

「殿方は氣樂ですわね。」

と、女房さんも笑つて。

「あなたは、御飯の仕度をなさいませんか、私の方はすつかり済みましたから。」

「ええ、有りがと、ですが、私、今晚欲しくありませんし、良人で歸つて來ませんから見合せてをきますわ。」

「左様ですか、ちや何時でも御慮なく御使ひなさいましょ。」

と、愛想よく笑つて、女房さんは影を落して仕舞つた。仲子はホツとしたやうにため息をついたが……

四

空はあかるくなつて來た。月が出るのであらう。何所となく仄白い光が雲のあい

だを流れてゐる。

仲子はふら／＼と歩つて、階段のそばまで來たが、思ひついて机の抽斗をあけると、中には鈔からの紙幣が入つてゐた。

「こんなものが今更どうなるだらう。」

と、呟やいたが、それでも尙帶の間にはさんだ。然し、何枚あつたかは數へなかつた。それは貧しく育つた仲子には想像も及ばない金額ではあつたけれども……

「如何か爲つたんぢやありませんか、大變顔の色が悪うござんすよ。」
外へ出やうとすると、女房さんが袖を引くやうにして言つた。

「頭が痛くつて仕方がありませんから、ちよつと戶外をぶらついて來ます。」
と、言つて仲子は外へ出た。

外はすつかり夜の景、家から家を流れる風の冷たさ。しつとりと濕りを帯びた袂に重く吹く。大川の面は霧がほのかに立ちこめて、厩橋は墨箱のぼかしを見るやう

に浮き出してゐる。對ふ河岸、駒形のおたりにはぼんやりと赤い灯の輝やき。水の音と電車の響きとが、胸に痛く、街燈の灯が眼に泌みる。川のはとりを立ち迷つてゐると、身も心も、水の流れに惹き込まれるかとばかりに、滅入つた氣が一層滅入つて終ふのである。

「一體どうなるんだらう。」

思ふまいとしても、昔がなつかしかつた。折々、儚ない首尾をして送つてゐた昔がなつかしかつた。晴れて世帯を持つた當座は、人の家の二階に假住居ながらも、たい嬉しさ樂しさに、日の經つのも知らないで過したが、然し今は……今はもうその人からも棄てられたのだ。此の後どうして生きて行かう、何を樂しみに生きて行かう。

死のより他に術はない。さうだ。たゞ死あるのみだと、思つた時に、仲子はぞつとしてわが身を見廻した。醜いこの身體を見廻した時に、仲子はほろ／＼と涙を流

した。昔はなつかしかつたが、今は棄てられて憎い男の血が此の身體のうちを繞つてゐるのだ。

「どうしやう／＼。」

と、身悶えて泣いた。

ふと氣がつくと、淺草へでも行くのか、若い男女の二人づれが、仲子の目の前を横ぎつて行つた。女は足早な男にちよ／＼と追ひすがつて、むつまじさうに寄り添つて、人にも憚らず袖を並べたのを、

「おい／＼、そんなに寄るなよ、外見が悪いつたらありやしないぢ無いか。」

と、男の聲は尖つてゐた。

「だつて寒いんだもの。」

と、甘へるやうな女の聲、尙も執拗く寄つて行くのを、さりとて押しおけもせず、二人はその儘、肩を並べて歩く。

見るにつけても、聞くにつけても寂しかつた。自分にもそんな昔があつただけ、それだけ今の寂しさ果敢なさが犇々と身に沁みるのであつた。

江の島の辨財天へ参詣して、そのかへりに濱邊を散歩した時に、二人して言ひあつたことなども思ひ出された。辨財天が仲のいい人々の間を嫉んで、二人づれで参詣するとその仲を引きさくと、土地の人が言ひ傳へてゐるのも偽ではない。何かそこに神秘的の啓示があつたやうにも思はれる。

どうもあの時から、男の素振りが怪しかつた、中旗といふ友人も、あの時から自分の見聞した名である。あの時から別れる氣でゐたのだ。それを自分が何となく不安に感じたのはたゞ氣のせいばかりでは無かつたのだと、しみじみ思ふ。

五

何故あの時、もつと突込んで男の意志を慥かめて置かなかつたらう。あの時どう

して自分の覺悟を決めて置かなかつたらう。みんな自分が馬鹿だつたからなのだ。あの時別れて仕舞へば、今日これ程の悔と悲哀を見なくも濟んだであらう。男も卑怯だつた、薄情だつた。然し自分も不覺でないとは云へない。そんな薄情な男の心の底を見抜くことが出来なかつたのだから、自分も馬鹿だつたのだ。

とは言へ、あの中旗千代松の、親友よりも今更思へば腹が立つ。あれを思ひ、是を思ふと、絲を手繰るやうに、何時まで経つても際限は無い。こんな事をくよくよしてゐたので、男でさへも、生活しかねる今の世の中に、どうして口すぎがして行かれやう。心を強く持たねばならぬ、餘程しつかりせねばならぬ。と、きつと顔をあげた時に、櫓の音高く水の面に響かせて、一隻の荷足が、纜を急いでせつせと川下へ漕いで行くのである。

赤い灯がぼんやり舷頭に點つてゐるのが、ほのかに暗い水の面を照してゐる。それをちつと眺めてゐると、透き通るやうな美しい聲で、

「……………別れの風だよ、あきらめしやんせ、何時また逢ふやら、逢はぬやら、スイ
く……………」

と唄ひながら船を漕いで行く。

仲子はきつとなつて歩き出した。何所といふあてもなく、何時の間にもやら吾妻橋
の方まで来てゐた。早く歸らう、歸つて兎も角も、落ちついて身の振方を考へや
うと、もと来た方へ、もどつて行くと、その河岸に黒山のやうな人集りがしてゐ
る。

「何だらう。」

と、何となく不安な心持ちがして仲子はその人集りの方へ歩つて行つた。

「土左衛門だ。」

と、誰に言ふともなく、通りがりの人が言ひ捨てて走つて行つた。厭なことを
聞いたと云ふ風に仲子は眉を潜めたが、然しそれでも、物珍らしさうに其の群集の

方へ近寄つて見た。

「畜生！ うまくやつてやがる、抱きついてゐるせ。」

と、誰やらが言つた。その言ひ方がおかしいので、群集はどつと笑つた。仲子は
ハツとして胸を撫でた。

二人！ 心中！ と思ふと、今の今まで自分の身にもさういふ運命がめぐつて來
てゐたのだと、何とも言ひやうのない寂しい心持になつた。

人の後から恐々のぞくと、まだ曳きあげられず水に浮いてゐる二つの死骸があつ
た。足と足を紐でしつかり結びつけ、手と手をしつかり抱きあつて死んでも尙離れ
まいとしてゐる若い男女の死體を、仲子は何とも言ひやうのない果敢なく寂しい氣
持で眺めた。

鎌のやうな細い月の光が、しら／＼と水の面をてらして、男と女の死體が慘とし
て浮いてゐるのを、秋の夜風が吹いて過ぎる寂しさ。男の顔は半ば水に沈んでゐる。

女の白い顔の半面が波のまにまに、月のさす川面に痛ましく光つてゐた。

二人の着物は水に濡れて、びつたり身體についてゐる。男は二十三、四、女はまだ二十にはなるまいと思はれる。足も顔も、人の目に見える所は水ぶくれになつて眞白に光つてゐる。

『可哀想に、まだ二人とも若いや。』

と、誰やらが言つた。

秋の風が、さらさらと吹いた。

六

人々は一刻々々此の群に集つて來た。仲子は釘付にされたやうな心持になつて、ちつと立つてこの二人の死體を覗き込んでゐたが、何とはなく冷たい涙かはらくとこぼれた。

『思ひ詰めたんですね。』

と、誰やらが言つた。

『死ななくつても何とか方法がありましたらうに。』
などと言ふものもあつた。

『然し、死んでも悪かありませんね。ああやつて一所に抱き合つてゐられりや、未來に同じ運の臺つて譯ですからね。』

と云ふものもあつた。女の身許や、男の身の上に、さまざまの下馬評が加へられた。

死んでもいい、思ふ男と二人でならば、死ぬのも更に厭ひはしない。生きて棄てられた自分が幸福か、死んでも二人一所になつてゐる此の若い男女が幸福か、それは俄かには斷定出來ない。然し、棄てられて、汚れた身體を抱いて、生きてゐたと何の楽しいことがあらう。むしろわたしは二人一所で死にたかつたと仲子はしみ

じみと思ふのであつた。

『親のゆるさぬ私通といふ譯だね。』

と、こんなことを言ふものもある。

仲子ははつとして、われと自ら顔を赤くした。自分のことを諷刺られたやうな氣持になつて、我にもあらずばたくと駈け出して、その群集からはなれてはつと溜息を吐いた。

やがて河岸をあるき出した。川を渡つて來る風は寒かつた。仲子は、二人抱き合つて心中したといふ、その若い男女の面影を心に描きながら、あとから何ものかに追はれるやうな寂しい氣持で、わきめも觸らずに急いだのである。

軒燈の灯が段々うすれて行つて、夜が更けて來た。葉枯れた街路の梢が颯々として風に鳴つた。

川千鳥が悲しげな聲で啼き立てながら、低い水の面に羽叩きの音をさせてゐた。

家へ歸ると、もうすつかり表戸をしめてあつたが、中では女房さんが、ボツネンとして待つてゐた。

『何所へ行つて來ましたね。』

『ちよつと其所までですが、遅くなつて済みませんでした、あの良人では歸りませんでしたか。』

『ええ、御歸りになりませんよ。』

『さうですか、ちや今晚は歸らない積なんでせう、そんな事を言つてましたから、構はず表戸をしめて下さいな。』

『ええ。』

と、首肯いて、

『まあ、些と話してらつしやいな。』

『ありがたう。』

と、言つたが、それ程に心の餘裕はなかつたのである。女房さんは心配さうに、

「大變お顔の色が悪うございますよ。」

「どうも自分が勝れないもんですから、失禮して休むことにしませう。」

「その方がいいかも知れませんが、お火も埋けてをきましたから、暖まつて御体みなさいましょ。」

と、女房さんは親切に言つた。

二階へ上つたが、疲れたやうに身體を投げ出して、しばらくは何ごとをもする氣にはなれなかつた。今見て来たあの心中の死體、その男女が、満足したらしい死體を心に描いて仲子はとめ度もなく冷たい涙に暮れてゐた。

秋の名残の虫の唄、わが身の上にも似て悲しいと、勝手元で啼き立てるこほろぎの聲を、仲子はしみじみと聞いた。

赤い灯影

牛込も東板町へ入ると、まだ宵の口ながら夜中のやうに寂しい。秋風のつめたさに何所の家でも表戸をしめて、内からは灯影も洩れてはゐない。

そこに、とある横町の、ちよつとした門構への家がある。二階はまだ雨戸を閉さず、しめ切つた障子に、灯影が明るく射して居たが、寂として人の話聲も洩れなかつた。靜かに電車の音もない寂しい夜の山の手の町景である。

その門の扉に、びたりと身をよせて中を窺つた若い女——それは、彼の小川仲子であつた。四五日のうちにすつかり面やつれがして、五つも六つも年を老つたかと思はれるやうに、色も香も失てしまつた顔に、昔の美しい面影も見えなかつた。

小川記した標札をなつかしげに打ち仰いで、ほろりと一としづく、ため息と一所に細い聲の獨り語。

「ああ、せめて、光ちゃんにだけでも一日逢いたいわ。」

風が、その時、門の木立をさらりと吹いて、素枯れた葉が婆娑として地に落ちる音、物寂しくも仲子の耳朶を打つたのである。

不圖氣が付くと、向ふから人が来る。慌たしく扉を離れて、さりげなく歩つてゐるのを、ちつと暗をすかして見て、

「まあ、お前、お仲ぢやないかい。」

「えッ？」

と、ギョツとして、

「母様ですか、まあ。」

と、ばたくと駈け出した。それを追ひかけて来た四十餘りの品のいい女、三子

の母親であつた。

「母さん、済みません、面目次第もございません。」

と、仲子は母親の袖にすがつて泣いた。

「済まないの、面目ないのつて、そんな事はどうでもいいがね、お前、本當にどうして暮してゐたの。」

やさしく聞くのも、生の母親なればこそと、仲子はほろりと先立つ涙を拭ひもあえなかつた。

「母さん。」

「どんなに案じてゐたか知れないのに、ちつとも便りをしないんだもの、叔父さんや叔母さんとはとにかく、生の親の私へ、何だつてまた隠れてゐたの。」

「済みません、あたしが悪いんです。」

「大變やせたちや無いかね、そしてまあ其の身體で……。」

と、母親もほろ／＼と泣く。

打ちあけて、それと言はれぬ悲しい境地になつた今の身の上を思ふと、母に合せ
るのも面目ない顔であつた。仲子は熱涙に咽せふのを、虫も嘆くかこほろぎがほろ
／＼と泣いた。

「面目次第ありません、御恩になつた叔父さんの家を逃げ出したんですから、私
なんぞは如何ならうと天罰ですけれども、そのために母さんや光ちゃんに御心配
かけたのは、あたし、何とも申譯がありません。」

「お前、叔父さんのところへ寄つて来たかい。」

「いいえ、寄れません、せめて叔母さんにでも御目にかゝつて御詫びしやうとは思
つてましたけれども……」

「寄つても仕方があるまい、あの人たちも思つたより酷い人だよ。」

と、母親は言つた。何を思ひ出したのか、口惜しさうに齒を喰ひしぼるのを、仲

子はちつと見て、我にもあらず膽を冷されたのである。

「母さん、何かあつたんですか。」

と、仲子は心配さうに訊いた。

二

母親は聲をあげて泣いた。

「お前は何にも知らなかつたわね。」

「えッ、知らないつて、何を、どうしたんですか。」

と、何かは知らず、仲子は氣遣はしげに、聲をふるはせる。髪の毛の亂れ、胸の轟ろ
き、足は宙に迷つてゐるやうな氣持がした。

「あの人も酷い人さ。」

と、母親は吐き出すやうに言つた。

「委しく話して聞かせたいが、何だか此所ちや誰か来さうで氣が落ちつかないから、彼方の木のかげまでお出で。」

「ええ、参ります。」

と、仲子はあとに従つて歩いた。

自分の生の子が来ても、家内へも寄せられず、風にも氣を置く悲しい身の上であつた。仲子にはもう一人、光子といふ妹があつた。他に弟妹は五人も六人もあつたけれども、それは種がはり、父親が異つてゐた。

仲子と光子を生ませて、二人の父親は死んだ。頼るところの無い母親は、二人の連れ子をして今の良人に嫁いで来た。そこには種々止を得ない事情があつた。新しい父親はかなり仲子姉妹を可愛がつたが、やがて自分の子が生れると、幾分疎んずるといふ傾向も見えて来た。ことに物入りの多い娘のこととて、母親は間に立つて辛い憂世の義理に泣いたことも幾度あつたか知れないのであつた。

此の故に、異父の弟妹が澤山ふえて来たのを口實にして、仲子は小石川にある叔父叔母の家へ貰はれて行つた。そして其所で十五六年の長い月日を過した。妹の光子は母の手助けにもと、ちいさい弟妹の世話をしながら、女中のやうに勝手元を立ち働いてゐた。

仲子が、種長と戀に落ちて叔父の家を出たときに、叔父も叔母も怒つた。自分の子として育てた最愛の仲子に裏切られたと云ふことが、一層叔父叔母の心を激せしめたのである。

のみならず、ある富豪の次男を養子にして、仲子と結婚させて家を嗣せやうと思つて、内々その話を進めてゐた矢先なので、その激怒は一層甚だしかつたのは言ふ迄も無い。仲にたつて困るのは仲子の母親であつた。

「あたしも困つたよ。」

と、母親は寂しげに言つた。

「済みませんわ、あたしが悪いばかりに、母様に飛んだ御心をかけます。」
と、仲子は身も世もあらぬやうに、身をふるはせて言つた。母はわが子の痩せ衰へた顔を痛々しそうに見やつて、

家出をするときに、せめて母親さんに相談してくれるとよかつたんだがね、お前の悪いやうにはしなかつたのを。」

「済みません、あたしが悪いんです。」

「けれどもね、今になつて考へて見ると、お前はやつぱり叔父さんのところになかつた方が幸福だつたよ。」

と言つて、ちつとわが娘を見た。

さりとして此のやつれた顔、昔の面影もなく變りはてたその身體。少しの間にとんな苦勞をしたことやら、何方が幸福だつたか、それは分らないと、母親は涙をうかべて、今更のやうに凝り、仲子、瞠めた。

「お光もどんなに心配してゐたか知れなかつたよ。」

と、母は寂しげに言つて顔を背向けた。仲子はハツとして氣づかはしげに、

「母さん、光ちゃん、光ちゃんは、光ちゃんはどうなすつて？」

と、言つた。

三

「お光かい。」

と、母親は寂しく言つて、またしてもその顔、背向けるのであつた。

「光ちゃんは何して？」

と、呼吸を喘ませる。

弟妹は澤山あるけれども、それはみんな父親が其ふ……その親しみは自から思つてゐるのだ。姉にも妹にも、お互ひにたつた一人の仲子であり、九子である。母に

はともかくも、妹の光子に逢ひたいと思へばこそ茲までやつて来たのだ。

「お光はね、ああ。」

と、ため息をついて、

「お光は家にはゐないのさ。」

「まあ、如何して？」

「生れついて容色のいいのが、かへつてあの娘の不幸だつたのだね、さう言へば、お前だつてそうには異ないがね。」

と、母親は鼻を詰らせた。仲子は呼吸が迫つて物は言へなかつた。媚も艶も消えた目には涙が溢れ、髪の毛が冷く飜れて、乳のあたりをおさへた手がわなくと、お召の羽織の袖に、風がからんで露に重くなびくのであつた。

「どつかの富豪の息子に、お前を嫁合せるつもりで、叔父さんが澤山仕度金をとつたんだつてさ。」

「まあ。」

「それなのに、お前があんなことになつたものだから、出来ることならお光をかはりによこせといふのさ。」

「それで、光ちゃんも叔父さんそこへ行つたんですか。」

「やらなきあ濟ないんだらうけれどもね、私もやりたくは無かつたし、お光も行きたくないつて言つたからね、とう／＼遣らなかつたよ。」

「それで、どうしました。」

と、仲子はせき込んで言つた。それもこれもみんな自分のためだと思ふと申譯なさの涙が留度もなく流れる。

「お光をよこさないんならば、金を都合しろといふんだよ。」

「まあ、あの叔父さんが。」

「さうだよ、淺ましい心ぢや無いか、話の次第によつては、あたしだつてお光をや

らない譯ぢや無いし、お光だつて行かないとは言はないんだけれども、叔父さんの出様が餘りだから、わたしもお光も腹が立つたのさ。」

と、母親はほろ／＼と涙をこぼした。さぞ口惜しかつたらうと思ふと、仲子はただ我身の罪を悔いた。

『お前を嫁にと望んだ人から、何でも随分金を取つたらしいんだね、それでお前がゐないもんだから、其の金を返さなきゃならない破目になつたから、金を辨償するか、それとも姉の代りに妹をよこすかつて、左様いつて來たのだよ。』

『濟みません。』

『濟むも濟まないもありやしない、どうせ左様した淺ましい心で、お前を世話をした譯でもあるんだもの、お前だつて温順しく家にゐれば、お金にさへなることなら、どんな辛いことをさせられるか分りやしなかつたんだよ、育ててくれた恩は有りがたいけれども、何も、そんな、心にもない身を汚すやうな事をしてまでも、』

恩をかへすには當らないわね。』

よく／＼其の頃のことを腹が立つたと見えて、母親は、口惜しそうに齒を噛みながら言ふのを、仲子は痛ましいと思つて聞いた。

『そしてね、お前、お光はね。』

と、言ひかけて、母親は何やら言ひ憎そうに口籠るのであつた。

四

『光ちゃんは？』

と、仲子は、それを追ひかけるやうに

『お光は、家にはゐませんよ。』

『ですから、何所にゐるんです。』

と、仲子は悲しげに訊いた。

「それより、お前は何所にゐるんだね、何とかいふ大學の方と、お前、今でも一所にいらしてゐるのかい。」

『あたし。』

と、すこし周章した。尋ねる妹の身の上は答へず、打ち明けるも悲しい自分の境遇を訊かれて、仲子は今更のやうに返事に詰つた。

『音の身體ぢや無いやうだけれども、氣をつけておくれよ、お光は家にはゐないし、お前からは消息はないし、心細いのは親母さんばかりだよ。』

『濟みません。』

『今、何所にゐるの、時々消息位してくれてもいい、ぢや無いか。』

あんなことに成つて家を出たのだ。これ／＼で棄てられましたと、如何して打ち明けられやう。お光もゐないで寂しいといふ母親に、どうして本當のことを打ち明けられやう。せめて逢つてゐる間だけでも、安心させて置かうと、仲子はさり氣な

く寂しい微笑を浮べて母の顔を見上げた。

『あたしのことなんか心配しないで下さいよ、是からちよい／＼消息をしますからね……本所の番場町にゐるんですが、まだ良人でも學生ですから二階住居の汚ない所ですから、何れお産の前にはどつか一軒借りるつもりですがね、その時は御知らせしますから、まあ當分訊かないで下さい。』

と言つて涙を飲んだ。

『さうかね。』

と、母親は不審らしくいつて、今更のやうに仲子の身の廻りを眺めた。

『あたしの事はとにかく、母さん、光ちゃんはどうしてゐるの、氣になるわ。』

『お光は……』

と涙をかくして、

『どうせ言はなきや成らないんだから……實アね、叔父さんの方へ返す金を拵へ

るためにね、今ぢや藝者づとめをしてゐるよ。」

「えッ、光ちゃんか……」

と、餘りのことに、しばらくは後の言葉も次げなかつた。

金をよこせと言つた所で、それはもとより出来ない相談であつた。出来ないところを見かけて、出来なきあお光をよこせといふのは何たる仕打、人を馬鹿にしてゐる。踏付けた仕打と憤慨して見たが、さてそんな人の所へは大切の娘はやれぬ。さりとして金は出来ない。叔父の方から矢のやうに催促する。思案に餘つて身は賣つたのだが……

それにしても、藝者になつたからとて、心がけ一つで、立派に操を通して行けないものではない。叔父の所へ行つて心に染ぬ人の妻となるよりはましと、娘がいふのに母も心を動かされて、さてこそ話は決つたのである。

「そのお金を叔父さんの方へやつてね、本當にあたしもせいしくしたがね、考へて

見りや、お光も可哀想なことをしました。」

と、母親は涙をぬくつた。

「申譯がありません、あたしが悪いばかりに、光ちゃんにまで辛いつとめをさせるんですもの、あたし本當に生きてる瀬はありやしない。」

「過ぎ去つたことは仕方がないから、お前も、閑があつたら時にお光にたよりをするなり、逢ふなりしとくれよ、あれも、どんなにかお前のことを心配してるか知れやしない。」

母と娘は、しばし相擁して涙にくれてゐるのであつた。

五

「おね

「折角お前が訪ねて來たのに、家へも寄せられないで、お互ひに因果な身の上だ

と、やゝあつて母親は、そつと涙をぬぐひながら言った。

「いえ、あたしがノコ／＼來られた義理ぢや無いんですけれども、つい此の先まで用達に來たものですから、つい母さんなり、光ちゃんなりに逢ひたいと思つて……」

と、悲しい胸の思ひを、母にはさりげなく装つて、晴れやかな顔を見せる辛さ。此の去りげない言葉のうらに、千萬無盡の悲痛が籠つてゐるのだと、母親は知るや知らずや、きつと形を改めて、

「お前も、馴れない世帯で、おまけに二階住居なぞしてゐて、する分苦勞が多いだらうね。」

「いえ母さん、あたしの苦勞なんか、自分で求めたことなんですから、唯末を樂しみに暮してゐますけれども、光ちゃんはどうなにか辛いでせう。」

「盛が身を助ける不幸つてね、家にゐるとき覺えてをいた唄や踊が大變役に立つて

ね、何でもつい一月ばかり前に披露目をしたのだけれども、おかげで流行さうでね、安心しろといつてよこしましたよ。」

「まあね、あたしも行つて他ながら逢つて來ますよ、何所でしたかね。」

「下谷の數寄屋町で、美津助といふのがそれだよ。」

と、寂しげな。

「ちや母さん、御健康で……」

「お前もたつしやで身二つになつとくれ、何時だつたね。」

「來年の二月。」

と、羞恥惡げに言つたが、然しすぐに蒼白い顔に、得も言はれぬ寂しい色をうかべて、きつと嘴を噛んだ。をくれ毛がはらくと頬に亂れた。

「寒い盛だね、ちよつと沙汰をしてくれ、ばどんな都合をしても行つて見るからね、電報でも打つてをくれ。」

「……………」

何事も知らねばこそ、此のやうに氣にもかけてくれる。迷惑をかけ、心配をかけた不孝な娘を、それ程までに心にかけて呉れるかと、仲子はよゝと泣いた。

「さあ、もう遅いからお歸り。」

「えゝ。」

と、泣くばかり。

「何かあげたいけれども、知つての通り思ふに任せない境遇なのでね……………」

と、帯の間を探ると巾着の中からいくらか取り出して、

「牛乳の代にでもしてをくれ。」

「あゝ、母さん。」

と、仲子は悲しさと嬉しさに、今はこらへ切れなくなつて、聲をあげておつと泣くのであつた。

「さあ、もうお歸り。」

「えゝ、母さんも御健康で……………」

「お前も……………」

と、鼻をすゝつて、

「無理をしないで、丈夫にくらしてをくれ、まだ御目にはかゝらないが、旦那様にもよろしく言つとくれ。」

「……………」

仲子はたまらなくなつて、母の袖にすがつて聲を限りに泣いた。電柱の赤い灯影が、わびしげに二人の姿を照してゐた。風が冷たく吹いて過ぎた。

別
れ
霜

仲子はたゞ夢中で歩つてゐた。あてもなしに暗の中を歩つてゐた。一生懸命に呼吸を殺して歩つてゐた。彼女のあたまの中には、やさしい母の顔や、なつかしい妹の顔や、戀しい憎らしい男の顔や、まだ生れぬ腹の子の顔などが、走馬燈のやうにぐるぐると廻つてゐた。

そして、今、自分が何所を歩いてゐるのか、何のために歩つてゐるのか、そんな事は些しも考へてはゐなかつた。何ものかに後から追はれるやうな氣がして、何となく急ぎ立てられて、たゞ一生懸命に歩つてゐるのであつた。

「濟まない、濟まない。」

と、言ひながら、路もわからない、眞暗な中を歩つてゐた。

ふと氣がつくと愕然として立ち留つた。今まで頭の中をぐるぐると廻つてゐたさまぐの人の顔が消えてしまつて、自分は江の島の海のはたに突立つてゐることに氣がついた。目の前には眞暗な海が物凄いい叫び聲をあげて鳴り轟いてゐることに氣がついたのである。波は彼女の突立つてゐる岩角に打突かつて、白い泡を嘴んで吠えてゐるのだ。

如何して此の鎌倉へ來たらうか、それすら明確と意識してはゐなかつた。母に逢つていろくと變つた人々の境遇を聞くと、どうしても生きてはゐられないやうな氣がした。ことに妹のお光は、自分が叔父の家を逃げ出したばかりに、辛い藝者づとめをしてゐるのだ。それだけでも申譯が無い、合せる顔も無い。せめて一目逢ひたいと思つて行つただけけれども、左様聞いては逢ふのが一層辛い。面目なくて顔があはされ無いと思ひ詰めた。

種長が残して行つた金の内を、母と妹に爲替に組んで送つた。あとの少しばかりを自分の懐中につけて、さうして何となしに江の島へ来たのは、なつかしい戀を語つた所でもあり、かつまた、東京で醜い死體を人に見られることを厭つたからである。

「死ぬんだ、死ぬんだ、そのためにわざとやつて来たのだ。」
と、思はず呟やいた。

さうだ、死を決して来たのだ。自分一身としても生てはゐられないのに、其の爲めに母にも妹にも、言ふ可くも無い心痛と悲しさを與へたのだ。死なうと決心したからこそ、今此の巖頭に立つてゐるのだ。

「死なう。」

と、叫んで、きつと暗い波の面を見入つた時に、仲子は、背後の方に犬の吠えるやうな聲を聞いた。

風は濕つぱく冷たい。波は渦を巻いて巖頭を打つた。遠い海の彼方を眺めると、湧きかへる波と波とが、雲のやうに押し寄せて来て、自分の生命は一步にして失なはれるのである。死は一刻の後に迫つて来てゐるのである。波の押し寄せるのは、自分の生命を攻め落さうとするためのやうにも思はれる。空も暗い、沖も暗い、遠海も暗い、自分の心も暗い。

どどツといふ物凄い波の音に交つて、何所からとも無く獸の鳴く聲が、空に響いて暗を劈ざく。仲子は何ものかに急ぎ立てられるやうな氣持になつて、もう一刻もちつとしてはゐられなかつた。何を考へて居る餘裕も無かつた。

つツと身を躍らして、逆まく波の中へ飛び込んだ時に、物凄い犬の吠える聲が、間近い背後に迫つたが、それを耳にとめて聞く間もなく、仲子はもう波のまに／＼浮き沈みをしてゐた。苦しい、辛い現世を離れて、未來の淨土に永遠不死の生活に入るべき刹那の樂しさに、何事を思ふ間もなかつた。

その時、何所からとも無く、一疋の犬が威勢よく駆けて来た。

二

大きな犬だ。小山の動き出したやうな、大きな逞ましい赤毛の犬である。爛々たる双の眼を光らして、ちつと暗い海の上を望んで高く一聲、ウーッと鳴いた。

そして、ぶるぶるツと身を慄はして、さつと波の中へ飛び込んだと思ふと、間もなく仲子の方へ泳いで行つた。と、そこへ、またしても足音がして、一つの黒い影が慌たしく飛んで来た。

『マル！ マル！』

と海の上を見ながら叫んだ。

眞暗な巖場に立つて、凝と海を眺めてゐたが、やがて懐中電燈をとり出して海を照した。一道の光明が、さつと波の上を流れ渡ると、その光の中に浮き沈みしてゐ

る仲子と、仲子に泳ぎ寄つて着物の袖を啜へて引ばつてゐる犬の姿が、活動寫眞のフィルムを見るやうに美しく描き出された。

其の人は、二十七八の眉目清秀な美青年である。詰襟背廣の洋服に、赤皮の長靴を履いて、肩に獵銃を擔いでゐるのは獵の歸途を、鎌倉へ立ち寄つたのかも知れない。但し獲物は餘り澤山ないやうだ。烏打帽をぬいで、額の汗をぬぐつた時に、犬はまた高く叫ぶと共に、もう宛で正體の無い仲子の袖を啜へて岸へ歸つて来た。

洋服の青年は懐中電燈をポケットへ収めて、靴の儘で波のじやぶくと打ちよせる岸に下りて、犬に力を合せて仲子を助けあげた。

助けあげられたけれども、仲子はもうまつたく緒切れてゐた。身體が唯でなかつた上に、水に浸つて揉れたので、すつかり疲勞しきつてゐたので、再び健康になるか如何かは、たとへば呼吸は吹きかへしても、それは疑問である程に惱ましく見え

ふと気がつくとも、仲子は見も知らぬ室に横たはつてゐた。

ふくよかな綿のはいつたメリンスの蒲團の上に、その疲れ切つた身體を横にしてかたのに気が付いたのは、それから二時間ばかりの後であつた。何所からともなくじやぶ〜といふ波の音が聞える。それに松風が和してさら〜と鳴つてゐる。虫がその間にまじつて切れ切れに、さながら何かの相の手のやうに鳴いて居る。

気がついたけれども、まだ目をあいて物を見定める程の元氣もなかつた。何とな〜く物憂いやうな心持がしてゐた。夢ともなくうつ〜とも無く、波の音と風の音と、虫の聲を聞いてゐた。何やら枕許で人の聲もするけれども、それは明確に分らない。聞きつける程の意氣地もなくなつて居るのである。

冷え切つてゐた身體が段々温味を帯びて来る。暖かくなつて来る。ぼんやりうす

暗かつた四方がほのかに明るく、たとへば夏の海を閉ざしてゐた靄が、朝の日光に段々晴れて行くやうに、やがて明確目の前に展開されて来た。頭腦の働きが段々確實になつて来た。波の音も風の音も、虫の聲も人の聲も、明瞭に耳を打つて来たとき、彼女は其の美しい眸を見開いたのである。

「お、お氣が付きましたね。」

と、もの柔らかな聲が、美しい音樂のやうに耳に響いて、白いやさしい顔が、つと仲子の目の上に現れた。

仲子は、眼はあいたとは云ふものの、まだ物を云ふ氣力はなかつた。その美しくい眸を曇らせて、露のやうな涙をほろ〜と流した。

三

それでも、起き直らうとして身をものがくのを、枕許に座つてゐた女は、眉をひそ

めてそれを留めた。

『あら、其の儘で被在やいよ。』

と云ふ聲がさながら、神の聲でも聞くやうに尊かつた。

「本當に、お氣がついてようごいまんしたわね、どんなに心配したか分りませんよ、さあ召しあがれ。」

と言ひながら、女はブド―酒を小さい猪口に濺いでくれた。何といふこと無しに又しても涙が溢れて出る。猪口をうけとる手がわな／＼と慄えた。

『……………』

感謝に餘る胸の思ひ、如何言ひ現はしていゝか、俄かには言葉も出なかつたのである。たゞ涙ばかりが先立つた。

『まあ。』

と、女は、いちらしさに堪えかねてか、そつと臉をふいた。

廣い立派な室である。天井の板にも、襖の模様にも、床の間、欄間、掛額もかけ物も、何れも數寄を凝らしたものの、何さま由緒ある人の住居と見える。電燈が點か無いのか、それとも主人の好でか、座敷には美しく飾つた臺洋燈が點けてあつたのが、何とはなしに仲子の疲れた心に柔らかに感じられた。

夜も更けたであらうのに、キチンとして身装もくづさずに座つてゐる女の、物柔しい眸が、ちつと仲子の惱ましい顔を打ち守つてゐる。

仲子は、あの巖頭で、暗い海の底に聲あつて招くが如く感じて、我にもあらず飛び込んだ刹那、不圖遠くの方で犬の吠えるのを耳にしたぎり、あとは何ごとをも覚えてはゐなかつた。

海の中でもがき苦しんでゐると、何ものかが來てその袖を引ばるやうに感じたが、その時はもう宛で夢中であつた。

そして今、氣がつくと見知らぬ室で手厚い今抱を受けてゐる、助けられたのだ。

死なうと思つたのに、その志も遂げられないで助けられた。何故人に見付かつたらう、何故死に得なかつたらう、助けられて何故呼吸を吹きかへしたらう。死に切れないで生恥を曝すわが身の上が、我ながら淺ましいことに感じられた。

静かにして休んでらつしやいよ、餘りくよく／＼心配しないでね、あたしたちが決してあなたの悪いやうにはしませんから。』

と、若くして、美しい女は優しい調子で言つた。

『はい。』

『折角、御覺悟をなすつた所を御助け申したのですから、さぞ餘計なことをする奴だと思召しでせう。』

と、つゝまじやかに笑つた。

死ぬなと人は言ふ、死んで花實は咲かぬから無分別をするなど、大體の人は言ふのだ。然るに此の美しい女は、死なうとした所を助けたのを餘計な世話だと思ふ

だらうと言つた、仲丁は言葉もなく目を睨るのであつた。

『餘計なことをする——と、お怒りなすつちや不可ませんよ。』

『怒るなんて、そんな失禮なことがありませうか、いつそ有りがたくつて、御親切が身にしみて嬉しうございます。』

『はゝゝゝ、あなたに取つては餘り嬉しいことではないかも知れせんわ。』

と、冗談らしく言つたが、氣を變へて、

『事情を御話しなさいまし、出来ないまでもお力になつてあげます、時と場合によつては御望み通りに死せてもあげます。』

と、力を籠めて言つた。

四

身重になつて、男に棄てられて、それで死なうとしました——と言へばそれだけ

のことであるが、さてそれが打ち明けられない。

「訊くなと仰有れば、それも訊きますまい、しかし、お家でもさぞ御心配なすつてらつしやいませう、御所だけでも伺はせて下さいましな、すぐに御知らせしますから。」

「……………」

「それも何なら、唯御無事であるといふことを、御知らせするだけでもいいでせう、御家の方に御目にかゝるのが御厭でしたら、そこは私の方で御心配のないやうに取り計らひますわ。」

「御親切に仰有つて戴きます。」

と、仲子はほろ／＼泣いた。

今頃、あの手紙が届いて、母も心配してゐるだらう、姉思ひの妹のお光が、狂氣のやうになつて騒いでゐるだらう、どんなにか嘆き悲しんでゐるだらう。それを

思へば胸も張り裂けるやうだ。

然し、死んだが増したつたと今更のやうに思ふ、醜いこの身體、四方八方の氣兼をして生てゐる母親、つらい勤めをしてゐるお光、——たゞ失望と怨恨と後悔と苦痛と、あらゆる悲哀の種ばかりではないか、あるに甲斐ない身だ、生る甲斐ない身體だ。出来るものならば、一度死なうと覺悟した身だ、此の儘でゐたい、死にたいとは思はぬ、たゞ何事も知らない人々の中に交つて、何事も忘れて過したい——がさりながら、自分は唯の身體ではない。此の儘下女にでも使つて下さいと頼む譯にも行かぬ。外へ行つて奉公することも勿論出来ない。やつぱり死ぬより他に自分のとるべき途は無かつたのだと、しみじみ思ふ。

それにしても、此所は何所であらう、自分を助けてくれた人は誰だらうと、仲子は今更のやうに四方を見廻した。

「それも仰有るのがお厭でしたら、何にも申しませんから、此の儘いつまでも、

御體がもどく通りになつて、赤らやんでも御産になるときまで、ゆつくりと、落ちついて御休みなすつてらつしやい、私どもでは、些とも構はないのでございませうから。」

と、やさしく言つた。

何と云ふ情のある言葉であらう、重ねくの我儘は咎めやうとはしないで、身體の癒るまで此所にゐろ、御産をして終ふまで此所に落ちついてゐるとは、何といふ身に餘りある言葉であらうと、仲子は胸が一ぱいになつて、涙は瀧の如く迸しるのであつた。

「でも、お家では、さぞ御心配なすつてらつしやるでせう。」

と、首を傾けて、美しい眸曇らせて、ちつと噴めて痛ましそうに訊くのであつた。

さう言ふ言葉のはし／＼にも見える親切さが、骨身に徹るやうな氣持がして、仲

子は物も言はず、わつとばかりに聲をあげて泣くのである。

すると、間の襖がさらりと開いて、二十七八の優さしい顔立の美青年が、静かに入つて来る様子、女は居住ひを直して、

「おや、御兄様。」

「どうした、餘り口を訊いて感情を昂ぶらせちや不可いせ。」
と、妹と並んで座つて、

「どうです、少しは氣分はよろしいんですか、ブドー酒でも飲んで見ますか。」

や、面長な顔、色は白く、眉柔和に、人を射るやうな眼光が、威を添えて、引き締つて見える。大島の羽織に、對の着物を着流してゐるのが、妹と顔を見合せて並んだ。

「其儘々々。」

と、起き直らうとするのを制して、微笑しながら、

「まあよかつた、此分ぢや大丈夫でせう、然し吃驚しましたよ、一日獵暮してね、少々ばかりの獲物を、たつた一人の妹と仲よく食やうと思つて、此の別荘へやつて来ると、マル(犬)が變に吼き立てるんでせう、そして海をめぐけてとつと飛び出したのです。」

と言つて眼を閉ぢて、ちつと其の時のことを考へる風をする。

犬のあとを追ひかけて海岸へ来ると、岩の上に黒いものの影が見えた、はつと思ふと、一生懸命に飛んで来た、犬はまつしぐらに岩をめぐけて躍り上つた時に、黒い影はひらりと海に飛んだ。

それが、あなただつたのです、でももう少し遅かつたらもう間に合なかつたかも知れませんが、それにしても犬つて奴は不思議な力を持つてるものですね。」

犬がゐなかつたら仲子は助からなかつたかも知れない、黒いものが人だといふことも、それが死を決してゐる人だといふことも、犬なればこそ直覺したのだ。人間に分ることではない、自然の力である。

「だから、あなたに、神様が死んではならぬと云ふことをおしめしになつたものです。」

と、青年は力を籠めて言つた。

仲子はたゞ感謝の涙にくれるばかりで、何ごとをも言へなかつた、さまざまの感じに頭腦が混亂して、胸が迫つて情が激して口が聞けなかつたのである。

「まあ、ゆつくり落ちついてお休みなさい、自分の家へ歸つたつもりで、心置きななくお休みなさい、あとで女中を寄越しますから、御用は遠慮なく伝附けて下さい。」

親切な言葉をのこして、兄と妹は連れ立つて出て行つた。果敢なくも味氣ないと

思ひ詰めた此世に、憊うした親切な人もあるものかと、仲子は急に心に張が出て来た。生るのが神様の思召だ。今、死んではならぬと云ふ神様の思召があつたればこそ助かつたのだ。生やう、生やうと勇み立つたときに、女中が替つて入つて来た。仲子は、此の女中からさま／＼のことを聞いた。此の若い主人は、高柳平太郎といふ子爵家の當主で、東京高輪の本邸にゐるのだが、今日は日曜日だったので日頃好な獵に出かけて、獲物を携さへて此の別荘へ寄つたのである。

若い美しい女は、平太郎の妹で、秋の初から病氣のために、此の別荘へ療養に来てゐるのだと云ふ。

「本當に、御さまもお嬢様も、お柔しくつて被在やいます。」

と、女中はしみじみ感じてゐるらしく言つた。仲子は黙つて首肯した。

* * * * *

死なうと思つた時に死なずに助かつた仲子は、生たい、死にたくないと感じた時には、もう逆も免かれ難い死が迫つて来てゐた。

心の悩みと、かてゝ加へて、風のさむい秋の夜を、水をつめたい海に浸されて、唯でない身體を揉まれたのが悪かつたものか、夜のあけ方から苦しみ出して、血が水のやうにどう／＼と下つた。

急報に接して醫者の駆けつけた時には、もう呼吸もたえ／＼であつた。その苦しむ呼吸の下から、平太郎兄妹の親切を謝して、

「母さん、光ちゃん、堪忍して下さい、私が悪いんです。」

六

平太郎の打つた電報に驚かされて、妹のお光が母親と一所に駆けつけた時には、

たと注射で生命をとりとめてゐるばかりであつた。

變り果てた姉の姿を見ると、光子は此の家の人々に挨拶するのも忘れて、屍骸のやうに冷たい姉の體にとりすがつて、聲をあげて泣いた。

母親はさすがに、平太郎や妹の雪子に、手厚い世話の禮を述べてゐる間は、憂をふくんだ眼は露を帯びてゐても、ちつと堪へてゐたけれども、呼吸もたえなくなつた。光子の姿を顧みると、前後不覺、あつい涙を、冷たい仲子の顔にはらくとこぼした。

平太郎兄妹も黙として涙を飲んだ。

「姉さん〜。」

光子は聲を限りに呼んだ。カンフル注射の効力がうすらいで、其の儘死んで終ふかのやうに、閉ぢもせず開きもせぬ眼で、何所を見ろといふことも無しに、見て居た仲子は、この聲に呼び覺されたかのやうに、

「光子ちゃん、母さん、堪忍して下さい。」
と云つた。

「お光ですよ姉さん、お光が来たんですよ、姉さん、もう一邊丈夫になつて下さい、姉さん、姉さん、姉さんつて言ふのに。」

姉さんといふのに、仲子はそれが耳に入らぬのか、入つても光子の姿が眸に映らぬのか、あらゆる方を打ち眺めて、夢でも見てゐるやうな眼の氣勢。光子は悲しき遺溺なさに、涙も聲も出なかつた。冷たい姉の手をしつかりと握つた儘、かつばと伏して身をもがいた。

母と妹は、仲子の兩側に座つて、絶望の目を悲しくも見合せなければならなかつた。仲子はもう人の見境のない迄に、その最期の時が近づいてゐたのである。

「姉さん。」

「お仲。」

と、二人は、それでも尙、兩方から聲を限りに呼び立てた。平太郎も雪子も、顔をそむけて鼻をすするばかり、黙として一語も發しなかつた。

それを最期の光明に、仲子の眸が火のやうに輝やいた。その瞬間、狂喜したやうな聲が、紫色に變つてゐる唇から洩れた。

「お、光ちゃん。」

「姉さん。」

と、つと涙の顔を出して、その手をしつかと握つて、耳のほとりへ口をつけて、

「母さんも來てゐるのですよ。」

「えッ？母さん。」

「仲ちゃんや……。」

母も寄り添うてその手をにぎつた。

「光ちゃん、母さん、あたしやもう駄目、お別れです。」

「姉さん、そ、そんな悲しいことを言はずに、もう一度丈夫になつて下さいよ。」
と言つて力を付けても、痛々しげに頭をふつて、

「ああ、もう何といつても駄目よ、でも高柳の殿様の御親切で……。」

と言ひさして、目をあげて何ものかを探すやうな風情、平太郎と雪子も、涙にぬれた顔をそこへ出した。それを見ると、心に餘る感謝を、眸に言はせて、

「御前様、御嬢様……。」

とばかり、あとは舌がもつれて音が洩れなかつた。今こそ最期と、光子も母親も熱身に水をかけられるやうな氣持になつた。屋根に霜をく秋の朝、冷たい風の音がして、千鳥の啼くのが悲しげに聞えた。

葛 紅 葉

一

藝者になつて、二ヶ月になるやならず、浮いた、華やかな、他眼からは如何にも面白そうなる此の社會に、さまざまの憂さ辛さが身に蒞々とからまつて來ることを知つた時に、光子の美津助は恐ろしさと厭らしさに夜も眠られぬことがあつた。無垢な、純な、この乙女の清い心と身とをわがものにしようとする恐ろしい惡魔が、煙のやうな舌をはいて付き纏つて來た。清く汚れない赤い血を吸つて終はふとする鬼が牙を嚙んで追ひかけて來た。初めて藝者商賣といふものゝ恐ろしさを知つた時に、光子はどんなことがあつても、死を以つてしてもわが心と肉の純潔を守らうと覺悟のはそを決めた。

姉の痛ましい最期を目のあたりに見、血を吐くやうな悲しい遺書を見た光子は、その無垢な胸に、しつかりと鍵をかけて、何人にも心の奥底を見せまいと決心した。姉を無慘に殺した男を憎い／＼と云ふ心が、やがて多くの男に對するお光の態度となつて現れた。

「千圓といふ大金を出して抱へたのは何の爲だと思ふえ、お前さんに働いて貰いたいからちや無いか。それなのに、厭だの、嫌だの、客はとりませんのと、駄々をこねられて堪るもんかね。」

と、ある時は強面で脅かされた。すい分と手酷い折檻にも逢つた。死ぬよりも辛い折檻をうけた。然し、乙女の心は鐵よりも堅かつた。

ある時はまた欺すやうに、すかすやうに、母親が泣く子をなだめるやうにして機嫌をとつて、客を取れと強ひられた。然し、少女の心は尙冷やかであつた。

如何に改められても、如何にすかされても、光子の美津助は顔として聞き入れな

かつた。如何してもウンと言はなかつた。三日四日はそれでも通つた。十日二十日は厭です嫌ですでも通つた。然し、一月も経ち二月となると、それでは通らなかつた。家でも差様々々は意地を通させてをく譯には行かなかつた。他の妓共に對しても、美津助ばかりに寛容な態度をとつてゐる譯には行かなかつたのである。

姉の仲子が死んだ當座は、お互ひにそれにまぎれてゐた。抱主の葛の家でも、それ程ひどくは迫らなかつた。時が経つとまた思ひ出したやうに客をとれと言ひ出した。前よりも尙はげしかつた。稼ぎ高が尠ないと言つて、毎日毎晩、筈を加へられた。他の見る目も痛々しい程攻められることもあつた。然し美津助はどうしても他の妓のやうに利巧に立ち廻らなかつた。

「光ちやんのやうに堅くしたつて詰らないぢや無いの。」

さう言つて、親切に説くよし奴といふ藝者もあつた。餘り攻め方がひどくつて、見てゐても痛々しい程であつても、誰も何とも言はなかつた。自分にも覺のあるこ

二

ととて、黙つて同情してゐるばかり、めい／＼の線香を稼ぐことに一生懸命で人のことなぞ考へてはゐられなかつた。稼ぎ高が少なければ、女將の機嫌が悪かつたので、誰もその機嫌を損ねまいと思ふし、甘い物も餘計に食べたい、着物も裝飾も人並以上にしたいから、誰でも厭々ながら御所を稼ぐのであつた。然し馴れてしまへばもう辛いことも無かつた。美津助はそれが出来なかつた。

「光ちやんのやうぢや、身體が續かないわ。いいかげんで我を折つて、主婦さんのいふことを聞いたら如何？」

などと、陰へ廻つて言つてくれるものもあつた。本當に恚うして辛い日が續いたら、お光の生命は人よりも早く失はれて行くだらうと思へた。

「初めのうちは厭な氣もするけれども、馴れて終へば何でもないわ、本當にさうし

てのちや損よ。」

などいふた妓は妻奴である。

「本當によ、堅いで通せりやそれに越したことは無いけれども、長い間にや、とても駄目なんだからね、いかげんで我を扱った方が、光ちやん得だよ。」
御親切に仰有つていたゞいても、わたしや如何あつても厭です、殺されて死んでも厭なお客をとることなんか、思つて見てもぞつとします。」

濡れぬ先こそ露をもいとへだ——としみじみ思ふ。然し、今の世の中には、藝者の藝ばかりを買ひに来る客はなかつた。酒の酌のみで満足してかへる客はなかつた。容色が如何に美しくいからといつても、顔を見ればかりで満足して行く客はなかつた。誰でもさつと御所櫻を要求した。それをことわるのは辛かつた。茶屋料理屋でもいい顔はしないやうになる。お客も面白くはない。従つてお座敷は段々少なくなつて来る。自然従つて女將の機嫌はよくあらう筈がない。

自分さへ些と辛い折檻を我慢してゐれば、初めはそれでも濟んだが、然し、それで濟まない時が来る——客も一夜二夜の伽をさせるだけの心持ちなのは、

「あれは如何だらう。」

と、料理屋の女中に耳打して、

「とても駄目ですよ、他のになさい。」

と、言はれて黙つて温順しく引き下りもしやうが、執念く思ひ込んだのは、それだけでは手を啜へて見てはゐられ無い。

厭だといへば尙更思ひの増すものだ。初めはたゞ一夜の情けのつもりで呼んだのが、手さびしくはねつけられると、妙な所へ意氣地を張つて、如何でも手に入れやう、自由にしやう、左様しなければ男の面皮にかゝると、エライ鼻息になつて執拗に付き纏つて来る。

「何時まで経つたら借金が返せると思ふんだい。」

と、鳶の家の女將伊藤君江は自棄半分の金切ぐるをあげて怒鳴つた。そばに美津助は泣きふしてゐるばかり、顔はあげられ無い。

お前一人は貞女を通して、それで心持がよからうけども、大金を出して抱へてさ、仕度やら何やらだつて随分お金をかけてある、私の方はどうしてくれるつもりなんだい。」

「済みません、あたしが馬鹿なもんですから。」

「済みません、馬鹿だといつてりやそれで申譯が立つと思つてるんだね、本當にお前さんは圖々しいよ。」

「あれ、女將さん。」

「本當に生圖太い奴だよ、お前なんか馬鹿にされてこの商賣がやつて行けると思ふのかね、何のためにお前さんに金を出したんだよ、お前さんはそのお金で、親子

のものが助かりますつて言つたのを覚えてゐるだらう、おかげ様で助かります、御恩は忘れませんと言つたのを、よもやお忘れちやあるまいね。」

「はい。」

「いくら容色がいいからつてさ、誰がお前、お前さんに千圓といふお金を投げ出すものがあるかね、お前さんたち母子が可哀想だと思へばこそぢやないか。」

お光は齒をきつと噛ひしばつて俯向いてゐる。をくれ毛が蒼ざめた顔にかつて、凄い程美くしい。それを横から眺めて、朱維宇の長煙管を壘に突立てた女將、年は三十七八、眉のあとの青いのと、眼に險のあるのが、顔立を恐ろしく見せる。

三

「利足の出る金でお前さんを抱へてさ、利足のである金で身仕度をさせてさ、それでお前さんに我儘をされたんぢや、此方の商賣は上つたりだあね、華族のお妾が遊び

半分はんぶんに藝げい者しや家かをしてるんぢやないんだ、斯あんなう見みえたつて、生いのち命めいがけで商しょう賣ばいして
 んだよ、これで食くはうと思おもつて商しょう賣ばいしてゐるんだよ。」

「はい。」

「何なんとか纏まとつた返へん事じをおしよ、お前まへさんにはかり我われ儘ままをされちや他たの妓きへ仕し置ちが
 来きやしないぢやないか、本ほん當たうに今いま時じの娘むすめにも似に合あはない、お前まへさんも野や暮まだよ、そ
 れぢや損そんだよ。」

「私わたくしが馬うま鹿かですから。」

「そんな事ことは聞きき飽あきたよ、十五じゅうごや十六じゅうろくの小こ娘むすめぢやなし、もう二十にじゅうへ手てが届とかうつ
 てえのぢや無ないか、ちつたあ慾よくをお考かんがへよ、何なん時じまで若わくつちやゐないんだから。」

「……………」

「本ほん當たうにお前まへさんも強がうだね、その強がう情じやうが通とるものか、通とらないものか、わたしに
 も覺かく悟ごがあるから、お前まへさんも其そのの心こころ組くみでゐるがいいよ。」

「えッ？」

「お前まへさん思おもつてゐるかね、いえさ、初はじめて家うちへ来きたとき何なんと言いつたか覺おもえてゐ
 るかね、どんな辛つらい勤ごんめも我われ慢まんして此この御ご恩おんをかへしますと言いつたのを覺おもえてゐる
 かね。」

「はい、それはもう……………」

「覺おもえてゐたら、わたしに恥はづれをかゝせてくれなくつてもいいぢや無ないかね。」

「わたしや女おんな將しやうさんに……………」

「恥はづれをかゝせた覺おもはないつて言いふんだらう、だからお前まへは圖ず々ずしいつて言いふんだよ、
 わたしやお前まへのために、あつち此こ方ちやうのお茶ちや屋やさんやお客きやく様さまにどんなに氣きまづい思おもひ
 をしてゐるか分わりやしないぢや無ないかね、それでも耻はづれはかゝせないつて言いふのか
 ね、お前まへさんの御ご座ざ敷しきが減へつたりお客きやくが尠すくなくなるのは、そりやお前まへの自じ業ぎやう自じ得とくで
 仕し力りきが無ないとしても、家うちの抱かか妓きも、おかげで段だん々ぜん評ひやう判はんが悪わるくなるんだよ。」

「済みません。」

「言葉でばかりお詫びしてゐたつて、實地に見せて貰はなきあ何んにもならないわね、どうだねお前。」

「はい。」

「そこで相談だがね、お前さんが私に耻をかゝせる心組がなくつて、本當に私の恩を感じてるなら……恩に被せる譯ぢやないんだがね、人間困つてゐる所を助けられた程嬉しいことはない、一生忘れられないと思ふがね、現にお前も左様いつたがね。」

「はい。」

「そこで話があるのさ、わたしやあるお客に聞いたんだがね、恩を知つてるのと知らないのとで人間と獸類の區別があるんだつてね、つまり恩を知つてるものは獸類でも人間よりはエライので、人間でも恩を知らなかつたら、獸類にも劣るんだつて

わ、そんなことは、私なんぞより、今時の若い娘さんの方がよく知つてる筈だがね。」

「はい。」

美津助は俯むいた儘、ちつと疊に目を走らせて、手を膝にキチンと乗せてゐる。胸は痛い、頭は患む、女將はその險のある眼に冷矢を浮べて、

「私しや困つたことが出来たんだがね。」

「えッ？」

と、眸をあげるのを、ちつと眺めて、

「ある人にね、切迫つまつた必要があつてね、お金を二百圓ばかり融通して貰つたのさ。」

と、いつて煙草の火をつけて、スバ〜と吸ふ。

紫に煙が立ち上る間から、女將の顔が見える、険しい目が光つてゐる、美津助は恐ろしさに戦慄した。

「それで期限が来たもんだから、矢のやうな催促を受けるのさ、こんな商賈をしてゐて高利貸のやうな人から、大きな聲で催促されたり、差押に逢つたりするのは餘り面白いものぢやない、金があつたら叩きかへしてやらうと思つても、さて儘にならないのが金でね。」

と、いつてぢろり、又しても煙草の煙を輪に吹く。

「其の人がお前さんに執心なのさ、お前さんが一言ウンと云つてくれりや、そのお金を棒引にしやうつて言ふのさ。」

「……………」

「それも長い間如何斯うつていふのぢや無い、たつた一晩でいいつて言ふのさ、エライ執心ぢやないか、お前のためなら、たつた一晩で二百圓棒に振らうといふのさ、如何だらうお前、承知してくれる譯にや行かないかね、左様すりや私も助かるといふものだがね。」

「……………」

「厭だらうけれど、私を助けると思つて、困つてる私を助けると思つてね、たつた一晩、目を瞑つて言ふことを聞いてお呉れでないかね。」

「女將さん。」

と、涙ごゑで言ふのを壓へて、

「お前さんの心はよくわかつてるよ、分つてるのに私がこんな事を勧めるのは、本當はわたしも辛いのだ。」

「……………」

「さうすりや、わたしも助かるし、お前さんもそれだけ借金が抜けるといふものぢや無いかね。」

美津助は泣き伏して仕舞つた、脅かされたり、すかされたり、義理と人情と、恩とで、大手弱手から攻め立てるのを、如何答へていふのか、たゞ思ひ迷ふのであつた。奥の心は初めからちやんと決つてはゐるけれども、然し、ああ然し……、斯うしてゐる内に、いつか此の心が踏みこじられて終ふのではないか、一日二日と言ひ延してゐても、やがて身動きの出来ない時が来るに異ない。その時になつて如何しやう、死なうか、死なうか、死んでも此の身は仇し男には汚されまい。死んで身の潔白を保たうか、さりながら、あとに残つた母親がどんなにか迷惑をするであらう、義理のある父親が如何ばかりか迷惑をかけられるであらう。死ぬに死なれず、さりとて生る甲斐なきわが身が我ながら痛ましかつた。

それからあとは女將が何を言つたのか少しも覺えてはゐない。種々とうまいこと

を並べたやうだが、明瞭頭には入らなかつたのである。

「まあ、ゆつくりお考へよ、何も今晚に限つたといふ譯では無いのだから。」

と、女將は、柱時計を見て、

「おや、もう四時だよ、日が短くなつたわね、お湯にでも行つてちと綺麗にみがいて来ないかね。」

美津助は返事はしなかつたが、軽く會釋して立ち上つた。二階の室へ戻ると、障子をあけて、窓に身を倚せて忍び音に泣いた。自から生る力はなくて垣を頼りにより縋つてゐるのに、赤い夕日の薄くさした蔭の葉が、わが身に與へられた運命のやうに見えた。

悪魔の聲

—

美津助が御座敷で、何心なく紅葉亭の門を潜つたのは、それから二三日経つて後の晩であつた。

紅葉亭は、池の端に此の頃出来た待合兼業の料理屋である。憚うした家にも拘らず、主人が、ある有名な料理屋の板頭だつたので、料理は通客を嬉しがらせるやうな腕の冴を見せたので、新しい割合によく流行つた。

此家の女將は、鳶の家の女將とは、昔の友達だつたとやらで、お互ひに藝者を呼んだり、客を紹介したりした。丁度其の日は、十一月ももう中半、曇り日の空はどんより低く垂れ下つてゐて、濕っぽい風が吹きまくつて、上野の森に啼く鳥の聲も、

何となく沈んで聞えた。

何心なく二階へ上つて、奥まつた一室、襖をさらりとあけると、中から赤い灯影が、お光の肩に流れて、愁を帯びたその顔を一段美しく見せた。淑やかに手をついて、

「今晚は。」

といつて顔をあげると、ひやりとして肩から冷水を浴せられるやうに感じて、思はず立ち縮んだが、入らない譯には行かなかつた。

「やア、天使が御來迎になつたね。」

と、聲をかけた客が、此の間から女將に喧ましく言はれてゐる、その男、橋尾龜治郎と云ふ、會社員だが、内職に金貸もするといふ、もういゝ年のお爺さんであつたから、はつとせざるを得なかつたのである。

「どうしたのだ、入れ。」

と、龜治郎は機嫌よく言つた。

「……………」

「まさか取つて食うとはしないせ、は、は、は。」

と笑ふ、その笑ひ聲の底には恐ろしいものが隠れてゐるのだと思ふと、お光はぞつとした、それでもさりげなく傍へ寄つた。

「お酌。」

と云ふ聲がふるえてゐた、お銚子を持つ手も初心らしく慄えてゐた。その顔をぢつと瞷めてゐる。龜治郎の眼の光を、美津助は又となく恐ろしく厭らしく感じた。

盃の行き交ひ二つ三つ、龜治郎は陽氣らしく、若々しい聲をあげて唄つたり踊つたりした。刻一刻と近づいて来る恐ろしい時を思つて、美津助は針の筵に座つてゐるやうな心持で、三味線を弾いてゐるのも落ちつきが無かつた。

「どうした、ちつと浮ないか。」

「ええ。」

「馬鹿に沈んでるぢや無いか。」

「私の氣性ですから、持ち前だから仕方がありませんわ。」

「悪い氣性だ、それぢや藝者はつとまらないぞ。」

「自分でも左様思つてます。」

「何といふ御愛想のない妓だらう、然し、そこがお前のいいところかも知れない。」

「如何でせうか。」

「もとは左様でもなかつたやうぢや無いか、どうだ、もつと浮けく、ちと陽氣に騒がないか。」

「ええ。」

「心もとない返事だぞ。」

その内に藝者が五六人——新吉小川のよし奴、元叶家の妻奴、金子家のさなえ、

白拍子のベ子なんて美しい姐さん達がやつて来る。踊れ唄へ、騒げの大亂痴氣。し奴の静御前、妻奴の忠信、さなえの浅妻、ベ子の道成寺、清元、常盤津、長唄、義太夫、歌澤から、サノサ節、ラツバ節、マツクロケー、詩吟まで出る藝づくし、いやもう騒々しい芝居が、漸やくかよつた時は、もう夜も大分更けた。

二

何が何やら宛で夢中で美津助は池の端を駆けて歩つた。鳥田の鬚ががくく動く、裾長い座敷着の袂もとらないで呼吸を切つて歩いた。肌寒い風が池の面から吹きあげて、蒼白い美津助の顔に當る。

観月橋の上へ来ると、ふつと氣がついて立ち停つた。そして今更のやうにわが身のまわりを見た。をくれ毛を冷い風が吹き亂す、我にかへつて橋の欄干に身をよせて、暗い池の面を見入つた。満地の風つめたく、満天の雲黒く、上野の森は目の上

に聳然として魔の城のやうに突立つてゐるのだ。夜は更けた。

「如何しやう、何所へ行かう。」

と、思はず獨語した、そして過ぎ去つたことを顧みた。

一座の藝者がみんな歸つて仕舞ふと、女中も引き下る。さりげなく酒盃を重ねてゐるうちに、龜治郎はそろく女將を通して言つて置いたことを仄かし初めた。二百圓どこぢやない、千圓でも二千圓でも出してやる。落籍してもいい、親も弟妹も困らないやうに手當をしてやる、いろく口に説き立てたが、美津助はウンと言はなかつた。

優しく言つてゐたのでは、際限がないと思つたのか、龜治郎の目は野獸のやうに燃えた。そして暴力に訴へても美津助を意に従へさせやうとした。それを突きとばして置いて、物も言はずに二階を降りた、轉ぶやうにして階段を駆け降りた。今思へばよく逃れたと思ふ位、締め切つてあつた襖を突き破つて、女中たちの取り捕へ

やうとする袖を振りはなして、無二無三に戶外へ飛び出した。そしてわき目もよらずに、此所まで逃れては出て来たけれども……。

「おい、美津助ぢやないかい。」

と、不意に耳もとで鳴りわめく聲、はつとして物思ひしてゐた顔をあげると、馬の家の女將、柳眉を逆立てて睨んでゐた。

「あッ、女將さん。」

「女將さんも糞もあるもんかね、一體今夜のさまは如何したといふのたね。」

「……………」

逃げるには逃げられず、黙つて其所に立つてゐた。

「これさ美津助、人が優しく言つてればつけあがつて、よくも〜恥をかゝせるやうな真似をしてくれたね。」

「申譯がありません。」

「それで言ひ譯になると思ふのかよ、お前が橋尾の旦那のいふことを聞かないばかりに、どんなに私が氣まづい思をしたか、お前のやうな乳臭いの、いいやうに馬鹿にされたと思ふと、あたしや腹が立つて腹が立つてならない。」

「わたし、馬鹿にするなんて……………」

「そ、それが、その口が馬鹿にするといふもんだよ、恩も義理も忘れやがつて、わたしがあれ程頼むのに、本當に生圖太い餓鬼つたらありやしない。」

島田の付け根をつかんで、履てゐた駒下駄をあげて、美津助の背中を丁々と打つた。美津助は黙つて打たれてゐた。それが癢にさわつて、女將はこと更ら口惜しげに、

「畜生！人を、人を馬鹿にしやがつて、厭なら厭とはつきり言へばいいぢや無いかい〜くらかんの事を言つといて、いざと云ふ場合に逃げ出しやがつて、あたしが……………このあたしが、彼方此方へ顔出しがならないぢや無いか、この阿魔ッ。」

と、力を籠めて丁々發失と打つ。

三

夜が更けた、ことに寒い霜夜の池の端は人通りもなかつた。女將は、美津助の髪をつかんで下駄で打つたり、足で蹴つたり、口惜しげに言罵しりながら打擲した。美津助が紅葉亭を逃げ出すと、電話が掛つたので、委細は分つてゐたのである。

「女將さん。」

と、美津助はすつくと立ち上つた、髪が亂れて、目が血走つてゐる。

「えッ。」

と、女將は思はず氣を呑まれた。

「私の悪いところは重々御詫びします、けれども、私がお客のいふことを聞かないからつて、何もそんなに打たなくもいいでせう。」

「何をッ、生意氣な。」

「いゝえ、ちつとも生意氣ぢやありません、本當のことをいふんです。」

と、きつとして言つた。

窮鼠かへつて猫を噛む、美津助の眉はびり／＼と動いた。姉の内氣なのに引きかへて、妹の光子は幼少の時から柳山人に似て勝氣な質であつた。世の義理とか、人情とか、恩とかいふものに縛られてゐたればこそ、影を潜めてゐた。ちつと虫をおさへてゐた、それが今、ムク／＼と頭を持ち上げたのである。

「何だつて。」

「いえね、お金をお返し申したらそれでいいんでせう。」

「フフンだ、二百圓といへば大金だよ、それがお前に返せるかい。」

「返しますとも、立派にかへしてあげます。」

「ホ、大層立派な口を聞くね、ちや早速貰はふぢやないか、そしてそれを尻尾の

旦那に返して、ともかくも御諾びをして来やうよ、まだ紅葉亭にゐるかも知れないから。」

「そりや無理です。」

「何が無理だよ、お前が立派にかへすといふから貰はうつて言ふのぢやないか。」

「返さないとはい言ひません、けれども今はありませんから、明日の朝になつたら、さつとお返し申します。」

「冗談いつちや不可いよ、今手許にないものが明朝になつてある譯がないぢやないか、お前さんに立派な金持のお客でもあつたら知らないがね。」
と、冷笑して相手にしない。

「明朝になつて出来たらいいんでせう。」

「そんな一寸逃れは駄目だよ、出来なまゝ如何するえ。」

「は、は、は。」

と、美津助は冷かに笑つて、

「御心配には及びません、出来ないことはありません。」

「萬一出来なかつたら。」

「どうとも、女將さんの勝手にしてください、煮てなと、焼いてなと、たゞしは刺身につくつてなりして召しあがれ。」

「美津助ッ、よく言つたね、その口をお忘れで無いよ。」

「ええ、そりや言ふまでもありません。」

「よし、ちや今夜は勘辨しといてやるから、さつさとお歸り。」

と、言つて、立ち上ると、ぬつと顔を出したのが橋尾龜治郎である。

「女將も、美津助も、ちよつと待つて貰はうかな。」

「えッ？」

と、二人とも立ちすくんだ。

「どうせ返すものなら今夜返して貰はふぢや無いか。」
 「でも旦那……。」
 と、さすがに女將は躊躇して美津助を顧みた。寒い風が、上野の森から吹いて来て、暗い池の面に消える。

四

「光ちゃん、旦那はああ仰有るんだが、どうするかね。」
 と言つた。

龜治郎はさつきから二人の話を聞いてゐたのである。

「敗軍の將は兵を語らず、おれも随分美津助じや言ひたいこともあるが、然しまあ黙つてをかうよ、だが然し、魚心あれば水心さ、人われに辛ければわれまた人につらした、明日と言はずにたつた今夜返して貰はうぢや無いか。」

美津助は返事もしないで、まぢく龜治郎の顔を見てゐた。

「どうしたんだい美津助、明日出来るものが今夜出来ないと言ふのは、一寸逃れとしか聞かれないが、左様でなかつたら今夜都合して貰はふぢやないか。」
 と、龜治郎は言葉を次ぐ、美津助は冷然として、

「わたしやお前さんに何もお返する理由はありませんよ。」

「は、は、は、こいつあ失敗つたかな、ぢや女將、江戸つ兒は氣が短けえ、おまけに老人のこつた、明日が日ぼつくり参らねえとも限らねえ、二百圓の金は、たつた今戻して貰はうかね。」

「今夜といつても私ありませんわ。」

「美津助が出さうだから、受けとつて渡してくんねえ。」

「光ちゃん、御覽の通りの始末だが、お前さん、今夜都合してくれる譯にや行かないかね、あれ程綺麗な口をお聞きなんだから、今更駄目だとは云へまいね。」

と、女將は詰め寄つた。

「男のやうでも無い、赤坂に可愛いのがあるやうでもない、卑怯なことを仰有るわね、ちや今夜こしらへませう、お世話でも、あたしと一所に来て下さい。」

「何と言はれても金さへ戻りやいい、お金とならば何所までもさ。」

「ちや光ちゃん、何所へ行くんだか知れないが、そろそろ出かけやうぢやないか。」と、女將も促がした。

美津助が左様いつたのは當がない譯ではなかつたのである。姉の仲子が死を決した時に、銀行爲替で送つてくれた金が二百圓ばかりあつた。母親のところへも二百圓よこした。高柳平太郎から姉の危篤だといふ電報を受けとつて鎌倉へ駆けつけた時、何かの費用にと思つて、美津助も母親もそれを現金に換へて持つて行つた。然し、葬儀やら何やら、一切の費用はみんな高柳が出してくれたので、二人は持つて行つた金を持ちかへしたのである。その金を美津助は母親に預けてをいた。取

つて使ひたいなどといふさもしい心は持たなかつたけれども、今の場合、それを融通して貰ふより他に方法は無かつたのである。

* * * * *

自働車に乗つて、牛込の東横町へ来たのは、それから三十分ばかりの後であつた。母親は何ごとが起つたかのやうに吃驚して起きて来た。

「お前、今頃何なの。」

驚くのが當然である。驚かすのが辛さに明朝といつたのだが、それが聞かれないから仕方が無い。心に詫びながら、美津助の光子は、預けて置いた金を貸してくれぬかと、言ひ憎さうに口を開いた。

「今頃わざわざやつて来る位だから、切迫詰つた上、よくよくのことなんだらうね。」

と、母親は困憊した心の惱みを、其の顔色に現はして、ほつとため息をついた。

五

美津助はハツとした。

不安と危惧と恐怖とに、胸は高く鼓動して來た。然し次の瞬間には、もう覺悟を決した。

「でも母さん、間に合はなければ今晚といふ譯ぢや無いのよ。」

「左様かねえ、だつて急に入用なんだらう。」

「急に入用には相違ないけれども、無いものは仕方が無いわ、私の方で如何か都合するわ。」

と、美津助は事もなげに言つたが、外に自動車で待つてゐる女將のことを思ふと、餘りいい氣持はしなかつた。

「わざわざ來てくれたのに、濟まないわね、二三日間があつたら如何か都合しやうけれども、實は退引ならない破目になつたものだからね。」

「いいわ、構やしませんわ、今時分不意に來るわたしが悪いんですもの。」

と、美津助は寂しく笑つた。

「濟まないわね。」

「いいの、母さんは心配しないで下さいよ、他で都合しますから、なに、どうかありませんよ。」

と、事もなげに言つた。

悄然として母に別れて門の外へ出た、軒燈の灯にてらし出されたわが影の寂しさに、美津助は肩をすぼめて歩くのであつた。

「どうだね、光ちゃん、出來たかい。」

と、女將は言つた。

美津助は無言の儘首肯いた、そして矢張り無言の儘自動車に乗つた、龜治郎は葛の家で俟つてゐるのだ……。

『どうとも勝手にして下さい。』

といつて、美津助は其の身體を二人の間に投げ出した。

葛の家の奥座敷で、龜治郎は留守居の飯焚婆を相手に俟つてゐた。歸つて來た時は、もう十二時を過ぎてゐた。抱妓の藝者は、酒の香に酔ふて待合へ泊り込んだものか、一人も歸つてはゐなかつた。

『えッ？』

と、女將の方で吃驚した、出來たと思つて一所に歸つて來たのに。此の始末、顔色さへも變つてゐるのだから、すつかり驚かされたのである。

姉の仲子から二百圓の金が届いたといふことは、女將もうすく知つてゐた。それを母親に預けたのは、むしろ女將も口添へした位なのだから、あるひは出來ないこともないだらうと信じてゐた。

それが此の有様、先刻の立派な言葉もあるので、夜將の激怒は殆んど天井であつた。

『出來なかつたんだね、お前。』

とキリ／＼齒を噛んだ、美津助はちつとも悪びれず、落ちついて、

『左様でございます、どうも仕方がありませんから、勝手にして下さい、初の約束です。』

勝手にしろといはれると、女將もちよつとたぢろいだ。然しその餘りに落ちついてゐる態度を見ると、ぐつと癪にさわつた。

『いい覺悟だよ。』

と、ニヤリと笑つた。

龜治郎は吃驚して見てゐたが、つと近寄つて、

「へッ、先刻は御大層もない口を聞いたが、ヘン、出来ねえんだね。」
と、憎々しげに言つた。

六

美津助は、キツと口を噤んだ儘、まじろぎもせず、電燈を見てゐた、その顔は化石したやうに蒼白い。

「女將、二百圓の金はどうしてくれるんだね、今夜耳を揃へてかへす約束だつたぢやねえか、フン、分つた、こりや二人で喋り合せて踏むつもりだね、インニヤ、それに異ひねえ、あの顔でとかげ食ふか時鳥、面ばかりは綺麗だが、見かけによらねえ腹黒鳥だ。」

と、酔つたまぎれ、鐵砲食つた口惜しまぎれ、大きな聲で鳴りわめくのであつた、女將は眉を動かして龜治郎を見た。

「野暮な聲を出しなさんなよ、金はかへしてやるよ。」

「さあ返せ、たつよ今返せ。」

「蒼蠅いね、大きな聲をしなくも分つてらあね。」

「大きな聲は地聲だ、さあ返さねえか、返さなけりや盗賊だ、欺詐だ、鳶の家の女將は、拘藝者と腹を合せて欺詐をする……。」

「お黙り。」

と、女將は口惜しそうに齒を噛んで、

「野中の一軒家ぢやないんだよ、下谷の池の端は東京のうちだよ、餘り大きな聲を出して貰ひますまいよ。」

「返せ、金をかへせば文句はないんだ。」

「金を返すから證文をお出し、お金はいつでも證文と引きかへだよ。」

「ウン、その證文は……、その何だ、明日もつて来る。」

「フフンだ、それぢやお金もあしたの事さ、お前さんにや文句があるが、あしたお金をかへす時に澤山並べてやる。」

と、美津助の方へむき直し、

「光ちゃん、いえさ美津助さん、お前、重ねぐあたしに赤つ恥をかゝせてお呉れだね、その仇討はするから、よく覺悟をしないとだよ。」

とばかり、黒髪をつかんで左の手にくるくろ捲きつけ、右の手に長煙管を持ち直して續けさまに背中を打つた。美津助は黙として一語も發しなかつた。

見てゐる龜治郎でさへも、餘りのことに眉を潜めた位、それなのに、美津助は泣きもせねば聲も立てない、さすがにその美しい眸は涙に濕つてゐた。

「こん畜生！ 此の阿魔！」

と、女將は丸で半狂亂、見てゐても恐ろしい光景である。龜治郎は見かねて、コン／＼逃げ出して終つた。

「本當に腹が立つ、お前のおかげで、あのよい／＼のやうな龜治郎に何のかんのと文句をいはれたり、紅葉亭へも申譯のないことになるし、本當に忌々しいつたらありやしないよ、畜生！ 阿魔！ どうするか覺でてゐやがれ。」

と、あられも無い畜生呼ばりは、丸で惡魔の聲を聞くやう。髪を振り亂して怒氣をふくんだ顔は、惡鬼の面のやうに恐ろしかつた。

帯を解いて、着物を脱がせて、長襦袢に扱帯だけの姿にして、

「ごらん、他の妓はお茶を引いて家へ寢に来るやうな意氣地なしは一人もゐないんだよ、お前のやうなわからずやは、上野のロハ臺へでも行つて寢てをいで。」

と、髪をつかんで、する／＼と引ばつて來ると、戸外へ突き出すと、内から戸をびつしやり締めて終つた、美津助は氣を失つて倒れた。

岡 惚 れ

上野の森に、夕鳥が何に驚いたのか、消魂しい羽叩きをして、暮れかゝる夕の空へ怪しい啼聲と一所に舞ひ上つた。

上野の停車場へ青森發の汽車が着いた。

福島から仙臺地方へ狩に出かけた子爵家の當主、高柳平太郎は、その列車で東京へ歸つて來た。例によつて愛犬のマルがお供についてゐる。

貨車から出ると、マルは躍り狂つて平太郎の足にからみついた。獲物はその時々本邸へ送つて終つたので、腰には何にも残つてはゐなかつた。

「マル、今夜は貴様にも御馳走してやるぞ、久しぶりでおれは東京の酒が飲める、

お前には牛肉のスキ焼でも振舞はうかな。」

と言ひながら、平太郎は停車場を出た。停車場前の料理店や旅館は、宛で日中のやうに電燈が明るかつた。

池の端の紅葉亭で、平太郎は酒盃をあげた。庭に面した座敷、マルは牛肉のコマ切を山盛りにしたのを一皿、ペロリと平らげて終ふと、腹這になつて主人を守つてゐた、昔の勇士のやうに勇ましげに控へてゐた。

「いい犬ですわね。」

などと女中はお愛想を言つた、疲勞と空腹と、おまけに久しぶりの東京の酒のうまさ、しばらくの間に顔に出ていい氣持に酔つた、軽い、浮ついた氣分になるとふと美津助のことを思ひ出した。

仲子を助けたのが縁となつて、初めて逢つたのだ、下谷で藝者をしてゐると聞いた、姉よりも勝れて美しくいとしみじみ思つたが、然し、恩をかさに着せて、よし

ない戀を迫ると思はれるのが心快くなかつたので、心にはかけながら出かけて來なかつた。

哀れ氣な境遇が痛ましかつた、姉は男に棄てられて死し、妹はそのために藝者をしてゐるといふのが物哀れで、顧負にしてやりたいと思はないでもなかつたが、然し時もなかつた。

今は其の時である、實は自から時を作つた次第でもある。東北地方へ狩に出かける時には、行きかへりとも決つて、池の端の雁鍋で、一人なれば一人、同行があればその人と、決つて酒を飲んだものだ。

それが、今夜に限つてこんな家へ入つたのも、心靜かに美津助と語りたといふ氣もあつたからなのである。

「おい、誰か呼ぼうかな。」

と、酔顏朦朧、大分いい氣持らしく女中に言つた。

「結構ですわね。」

「酌は美婦つて言ふからな。」

「あら、私は美婦にや見えませんかね。」

と、調子がいい。

「お前も美婦のうちさ。」

「もの字付で御氣の毒様ね、ちや、もの字付でないのを呼びませうね、お馴染さんが御在なすつて？」

「さればさ、おれもそれ程意氣だと、今時分此所邊を鳥鷺々々してゐて、上野の森の鳥に脅かされなくも濟むんだがね。」

「は、は、は、仰有いませよ、鳥の方で脅かされたつて言ひましたよ、ズドンと一發ね、生憎あの時風邪を惹いてゐたんですつてさ。」

「は、は、は、どうせおれの鐵砲に當らうといふ鳥だ、よく、生命のいらぬ奴だ」

らうよ。」

二

お酌しやくをしてをいて、さて立ち上あがる。

「おい、美婦みはを呼よぶんだよ。」

「しかと心得こころえしました。」

と、誰たれやらの聲色こゑいろになる。

「はてね。注文ちゆうもんがあるんだよ、分わつてゐるかい。」

「おや？」

と、座すわり直ただして、

「ですから、人が悪いつて言いふんですわ、あるんでせう。」

「何が。」

「はぐらかしちや不可いわ、鐵砲てつぱうで打ち留とどめやうと云いふ鳥どりですわね。」

「鳥どりはおれさ、椋鳥けいどりと言いふ位くらいだ。」

「は、は、は、異ちがひないわね。」

「異ちがひないとは正直しやうせきなことを云いふせ。」

「御免遊ごめんあそばせ、つい失禮しつれいいたしました、そこで何方どこなたを呼よびませうかね。」

「誰方どなた此方なたもない、いつそ下谷したや藝者げいしやを總揚そうあげげにして、その内うちから御見立ごみだてといふことにするかね。」

「結構けつこうですわね、鳥どりが大勢木おほせぎの枝えだに停とどつてる所ところを打うてば、一羽位はなはらみはまぐれ當あたりつて

「ほ、ほ、ほ、大分風向たいぶんかぜむきが悪いわるいね。」

「冗談じやうだんをいて、だあれ？」

「蕙つたの家の美津助みづすけと云いふのがゐるかい。」

「光ちゃん？」

と、女中は眉を潜めて、

「御馴染ですか。」

「と云ふ譯ちや無いがね、ともかくも呼んでくれ。」

「どうしてもあの妓でなくつちや不可ないんですか。」

「ああ、どうしても不可いね、正直な話、他の妓を呼ぶ位なら、わざわざここらを鳥驚つてはゐないんだ。」

「まあね。」

と、女中はちつと見た。

「光ちゃんか不可ないつて譯ちや無いんですけども、餘り可哀想ですからね。」

「こりや解らないね、可哀想だから呼んでくれと云ふのは聞えた話だが、可哀想だから見合せるといふのは變ぢやないか。」

「それが種々理由がありましたね。」

今まで巫山氣切つてゐた女中は、急に眞面目な、しんみりした調子になつて、昨夜の出来ごとを話して聞かせた。

「でもまあ、流石に女将さんも吃驚して家へは入れましたがね、可哀想に今日は朝つから寝てゐるんですつて。」

と言つて、女中は涙をぬぐつた、聞いてゐる平太郎も思はず暗涙を呑んだ、それ程に攻め折檻されても、尙肌身を汚すまい、乙女の情操を保たうとする美津助の意氣に感じたのである。

「さうか、感心な妓だ。」

「本當に感心な妓ですけれど……それで、旦那はどうします。」

「左様さなア。」

と、平太郎は思ひ迷つた。

「勝氣な妓ですから、お座敷だといへば我慢して來ます、けれど、そんなにしているのを可哀想ですわね、それをまた女將さんも意地になつてますから、無理につとめさせるんですよ。」

「ウン、まあいい、兎に角呼んで貰はふ、おれは決して無理なお座付を強るんぢやない、折角來たのだ、顔だけ見て歸らうと思ふ。」
と、平太郎は思ひ入つた様で言つた。

三

それはもう、下谷中の噂さに上つて終つたのである、感心だといふもの、野暮だとかさすもの、さまざまであつたが、さりともしらず、美津助は午前中寝てゐた。午後になると、身内の骨が痛むのを堪へて起き上つた、そして普通まへに御參詣にも行けば、お稽古にも通つた、痛いといふやうな色は少しも見せなかつた。さう

斯うしてゐる内に日が暮れる。

日は落ちて行く、街は晝のつかれを残して眠につくやうに、静かに日がくれて行く。上野の森は、蒼黒く、次第に黒く、赤い灯や青白い瓦斯の灯が點々と點るのが、目に惱ましい。

薄白く乾いた廣小路を、明るい影を横たへて、冷たく光るレールの上を、電車の軌る音が耳に響いて痛い。みやこ座や大正館の、樂隊の音も今夜は何となく厭に聞える。

細い街、藝者屋町には灯影がうつる、灯は段々濃く光つて來る。何所からともなく沈んだ三の絲の音、ゆるやか、亂調子な、野卑な流行唄などが、打ち交つて方々から聞えて來る。

鏡臺の前に座つて、わづか一晚のうちに、ぐつとやつれた自分の顔を見ると、美津助は、遺瀨ない思ひに胸を衝かれて、今朝起きた儘の寝みだれ髪をかき上る勇氣

もない。双肌をぬいだが肩も痛む手の節々も痛い、鏡に映るわが顔に、我からちつと見とれてゐると、いつか眼は涙に惨んで来た。

下では消魂しい電話のベルが鳴る、梯子段を上る足音がして、蓮葉な若やいだ聲、隣の室で浮ついた話が始まる。

「妻ちゃん、いいこと聞かせてあげよか。」

「ええ、どうぞ。」

などと、初の内はしほらしく言ひあつてゐたが、その内に柳山人のうわさや、茶屋の讒訴、情夫の惚氣、とりとめも無い情話に移る。

「此の前来た時にね、ウンと怨みを言つてやつたのよ、そしたらね、ブントく怒つてね、おれだつて仕事がある、お前にはつかりおつとめしてる譯にや行かないつて……いい草が氣に入つたわね。」

「その仕事を一生懸命にするのも、お前さんにおつとめをしたいからさ。」

「ほっ、ほっ、それでね、あたい、そりや分つてよ、だつて逢ひたいんだもの、仕方が無いわつて、甘へてやつたの、そしたらにつと笑つたの。」

「御馳走さま。」

「あの人のことだから、ひまさへありや来てくれるのよ、情のある……。」

「あら、たんとお惚けよ。」

「しどいわ、唐突につねつてさ、ほっ、ほっ、でも好ね、斯うして一日でも逢はないと、人どつかまへて何とか言つて見たいんだからね、やつぱしあたい弱味があるんだね。」

「もう澤山、澤山てば。」

「ほっ、ほっ、もう少し御聞きよ、あの人が斯う言つたの……。」

「澤山々々。」

「ほっ、ほっ。」

と、いい氣で巫山氣てゐる。

その内に鏡臺の曳出をあける音やら、白粉でも塗るのか、ばた／＼顔を叩く軽い音が聞える、美津助の神經は耳にむかつて集る、黙つて隣室の話をきいてゐる、さうして浮ついて暮してゐられる人々がしみじみ羨やましかつた。

「美津助姐さん、お座敷よ。」

と、下地子が上つて來た。

「さう。」

と、顧みだが、無邪氣なこの下地妓も何時かは悲しい運命に逢ふのだと思ふと、つい痛々しさに涙がこぼれた。

四

「姐さん、泣いてるの？」

と、其の娘は鏡の面を覗いた、昨夜のことを知つてるので、悲しさうな目に涙を宿してゐた。

「いゝえ。」

と、そつと袖をあてた。

誰が出て行くのか、切火を打つ音が聞えた、美津助は何時までも／＼鏡の面を見てゐた、幼い下地妓の薄紅をはいたやうな、可愛い顔も一所にのぞいてゐる。

「如何、すつて、姐さん。」

「ああ、左様だつたね、何方。」

「紅葉亭ですつて。」

「まあ。」

と、眉を潜めた、昨夜のことがあり／＼と目に浮ぶ、不快な感が込みあげて來た、口惜しい思ひが湧きかへるやうだ。

「主婦ちゃんも今日は休んだらよからうつて言ひましたよ。」
「さうかね。」

「紅葉亭でもね、美津助姐さんは御病氣だからと云つて、御ことわりしたんですけども、是非にと仰有るんですつて。」

「行くわ、すぐに御伺ひしますつて、さう言つといてをくれ。」
「被行るの、よくつて？御身體は。」

「ええ、構やしないわ、どうせもう死ぬんだもの、叩かれて、蹴られて、踏まれて、殺されても恨みは言はれない商賣なもの。」

と、寂しげに言つた。

* * * * *

それから二十分ばかりの後、美津助は紅葉亭の門を潜つた。

「まあ、よくね。」

と、女中は眉を潜めて美津助の姿を見上げた、口はかけたがよもや來はすまいと思つてゐた矢先、思ひがけ無い美津助の姿を見たので、何となしに涙をこぼした。

「自分の身體で自分の自由にならないんですもの。」
と、美津助は寂しげに云つて莞爾した。

「本當に、お察しするわ。」

「有りがと。」

女中のあとについて奥へ通ると、ふと犬の鳴き聲を耳にした、犬については嬉しい記憶が残つてゐる、高柳子爵の愛犬マルの靈妙の方のために助けられて、姉の仲子の昇期にも逢へた、其の時のいろ／＼、平太郎の親切が骨身に徹る程嬉しく感じてゐた。

口にくそ言はね、心に堅く秘めて、思ひ寝の夢枕さめて、果敢ないのを怨む夜も

あつた、朋輩藝者が情夫の噂をする時、自分も私かに其の人の面影を胸に描いて、われ知らず莞爾して他から煽られることも屢々あつた。

然し叶はぬ戀、身分も異ふのである、夫婦にならうの何のとは思つてゐない、岡惚で一生くらすうとも、他の男には心は移すまいと、かたく誓つた此の日頃、女將からあれ程の折檻にあつても屈する色のないのは、けだし平太郎に對する果敢ない戀からである。

「光ちゃん、如何したの。」

と、女中が肩を叩いた。

はつとして我にかへると、美津助は赤くなつた顔を其の儘、襖の外に手をついて、丁寧な挨拶しながら見上げると、こは如何に、今の今まで胸に描いてなつかしいと思つた其の面影をありくと、高柳平太郎が笑をふくんで此方を見てゐた。

嬉しい仲

—

もう十一月も末、青葉が紅葉して、朽葉になつて、散りのこつたのが二片三片、梢にかゝつてゐるのが、何となく寒さうな冬景色、朝から冷たい雨がしとしとと窓を叩いてゐた。

「やらずの雨、ね。」

と、云つて美津助は嬉しさに莞爾して、平太郎の枕許に座つた。目をあいて、天井を覗めてゐたが、起きやうとはしないで、何を考へてるのか、物も言はなかつた。

「お起きになりませんか、彼室にお炬燵を拵へて置きましたよ。」

「雨が降つてるのかい。」

「ええ。」

と、又嫣然した。

六疊の部室の片隅には、衣桁に紅色の友禪の燃えるやうな長襦袢が懸つてゐる、紐や扱帯や、そこらにはまだ艶いた色が見える。

人の呼吸の籠つた柔かい空氣が、ほのくくと室内をめぐつてゐたが、西向の障子は、雨の降る空のいろを受けて灰色に曇つて見えた。

「何時かね。」

「九時ちよつと過ぎ。」

「随分よく寝たものだ。」

と、平太郎は手を延して、大きな生欠伸をしたが、腫ぼつたく、薄赤味を帯びた美津助の、眠り足りないやうな眼を見ると、押し出すやうに莞爾笑つた。

「ほへ。」

と、何となしに、美津助も笑つた。

起きて、便所へ行つて、顔を洗つて座敷へ戻ると、雨の降り込む窓近く、障子をあけはらつて、美津助は悄然外を見てゐた。

「おい、何をしてゐる。」

と、肩を叩くと、吃驚して振りかへつた。

冷たい雨がさつと顔を撫でて、風が鳴る、梢が鳴る、美津助の眸には涙が光つてゐた。

「どうしたのだ。」

「泣いてゐましたの。」

「何故？」

「……………」